
学園ヘタリア

奈月ショウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園へタリア

【Nコード】

N9342U

【作者名】

奈月シヨウ

【あらすじ】

いたって普通の女子高生、あさのみこと浅野尊が通う事になった学校は有名なあの学校！

中学生時代の出来事によってその学校の事を知り尽くしていた尊に、ある日突然異変が起こる…?!

妄想に妄想を詰め込んだ二次創作パラダイス。

はじめに

こんにちはorこんばんは！

奈月シヨウです。

都合に都合が重なり、前作の学へたは消去致しました。
ご了承ください；

今回私の書く学へたは、前回とは全く違った流れです。
ありがちな「世界W学園に転校してきた女の子」の目線で語ります
が、
そこからまた何か違う流れを起こせたらどうか？と考えてできた作
品です。

いろいろ適当です。

あと主人公の順応が凄く早いです。

何それ無理って方は無理しないで下さい。

それでも良いよ！！って天使な方はよろしく願いします。

奈月シヨウ

気になる単語

「尊！みことー！」

隣の家から何か投げつけられ、私の部屋の窓にコツンと当たって跳ね返る。

「みことー！起きてるー？」

私が起きていないはずが無い事を知っているのだが敢えて聞いてくるのは、私に何が何でも窓を開けさせたいからだと推測し、私は外から差し込む光の影で浅葱色になったカーテンを開けた。

まばゆい光が私の瞳を突き抜け、身体に一本の芯が通ったかのように棒立ちになる。まぶしくて思わず目を細めてしまう。

「あはっ。起きてるね。相変わらず」

隣の家の窓から身体を乗り出し、おはよう、と声を掛けてくるのは腐れ縁の幼なじみの天道かなめ。

長い栗色の髪を垂らして、こちらに手を振っている。

「おはよう」

にこつと微笑んで挨拶を交わす。私は知らない人に緊張はしませんが、自分から話しかける事ができないので、相手から話しかけてくれると話がスムーズに進む。

「今日も何かやってたの？」

「動画サイト見すぎて徹夜した」

「でた、尊らしい。見すぎて徹夜って…ギャグじゃないんだからさ

…」

かなめが笑いながら言う。

春休み中盤。そろそろ高校生。

私は世間一般で言う…オタクになり始めていた。

動画サイトは毎日チエック。好きな作家さんのブログも毎日チエック。

「で、今回は何を見てたの？」

「えっと…ネット上で気になる単語が続出してさ…それを潰すために、一個一個見て行こうかと思ってただけ…」

私はノートパソコンを持ってベランダに行くと、かなめにその画面を見せた。

「一個見たら止まなくなっちゃって」

「あゝ、あるある」

かなめも一応はオタクに理解のある人だ。

私と付き合うには、オタクにある程度理解が無いとやってけない。

そして、私がハマったその単語。

ググってみたら見事にハマったその単語。

それが私の人生を大きく変えるとは知りもせずに、

時は、流れ始める。

揺れる心・尊

「え？引っ越し…？」

夜。やけに真剣な顔をした母親から告げられた一言は「引っ越しをする」だった。

「そうなの。お父さんの仕事の都合で、お父さんと私でニューヨークまで行くんだけど…ほら、私が高校時代留学してたから、お父さんは英語には困らないでしょ？でも、学校となるとまた違うし…」
きつと私の学校生活を気にしているのだろう。私は英語だけがくと点数が低いし、全く喋れないと言っても過言じゃない。

「だから…、尊には、寮に入ってもらおう事になるかもしれない…」
「寮…？」

漫画や小説でしか見た事の無いその存在は、私の心の期待を溢れさせた。

「国立…って言うのかしら。何処かの国が国総出で作ってる学校みたい」

「それって…えと、高いんじゃない？」

私は一つ思い当たる可能性を頭の隅に置きながら訪ねる。すると、思った通りの答えが返ってきた。

「入学したい、って言ったら受験も無しに良い、って言ってくれたわよ。しかも結構広い学校らしいわ」

尊なら大丈夫よね、と母は呟くと、にこつと微笑んだ。

間違いない。

その学校は、あの学校だ。

しかし、私の心の中では、その学校に行けるといふ期待感と、いろいろな気持ちは混ざり合っていた。

その中でも一番強い思いが、かなめの事だ。

今まで文句も言わずにずっと一緒にいてくれた親友。

小さい頃からどうでも良い事で喧嘩して、絆を築き上げていった唯

一の友。

かなめと離れるのは嫌だけど、学園に行けないというのが辛い。

私はどうすればいいんだろう？

揺れる心・かなめ

「…そっか。違う高校、行くんだね」

かなめに伝えたのは、次の日の朝。

いつもの様に私を起こしに来たかなめの声で目が覚めた。

昨日は不思議と身体がベッドに引き寄せられるようになって眠りに落ちていった。

「…嫌だな」

かなめが俯いて呟く。

「小ちゃい頃からずっと一緒だった友達と別れるのって…辛いんだね」

かなめが顔を上げる。清々しい笑顔で、私の手を握る。

「…かなめ？」

「よし、決めた」

私の手をぎゅっと握る。離さないように。それでいて、大事に。壊れないように。

「私も、一緒に行く！」

かなめの口から出たのは、思わずベランダから転げ落ちそうになるような一言。

「…はあ?!」

思わずぽかんと口を開けてしまう。

「離れるのが嫌だったら、離れなければいいじゃない! うん、そうだよ! はい、決まり!」

かなめは歌を口ずさみながら家に入っていこうとする。

「ちよっちよちよちよ待つて!」

「うん?」

不思議そうな顔で振り向く。

「いきなりそんな事：大丈夫なの？」

「あれ？言つてなかつたっけ？」

かなめはきよとんとした顔でこつちを完全に向いた。

「私の家、放任主義だ…つて、言つたっけ？」

「そんなの一言も聞いた事無いよ…」

かなめの一言に凄く驚いた。

ずっと一緒に過ごしてきたのに、知らなかつたなんて…！

「あ、そうそう、尊」

かなめが話しかけてくる。顔を上げると、そこには人形（どつちか）つて言つとフィギュア？）を持ったかなめが満面の笑みを浮かべていた。

「レスミョンくん、連れて行つて良い？」

「…うん、良いと思う」

フィギュアはオタクにとつての必需品だ。持つていかなければ精神が持たない。

ちなみにレスミョンくん、という名前は、私とかなめで付けた名前である。フィギュアは市販の物では無く、かなめが根性を積み上げて作った作品であり相棒でもある。かなめにとつては津波が来るなら命を捨ててまで守りたい物。

かなめは顔を綻ばせると、家に完全に入ってしまった。

今から準備をするのだろう。

私も準備をしなきゃ。

赤く染まつた夕焼け空には、ツバメが低く飛んでいた。

いつの間にか

「…はえ？」

翌朝。目を覚ました私の目に飛び込んできたのは、がたがたと音を鳴らす車の車窓。ちらりちらりと景色を見ると、だんだんそれらしい風景に変わっていく。

前日私が用意した荷物はしつかりと私の横に積み込まれていて、勿論ぎつしり中身が詰まっていた。

「…かなめ。かなめ…」

隣を見ると、私と同じようになめめの荷物、そしてかなめが眠りかけていた。

「…んゆ？…はっ。寝過ぎしたっ」

「今それどころじゃないでしょ…」

私とかなめがいるのは、どうやら普通の車の後ろ。前とは仕切りがあり、よく見えない。ごとんごとん、と私達自身も荷物のように揺られる。もうちょっと丁寧に扱ってほしい。

「え…ええ？何、ここ？ええええええ？！」

かなめが動揺する。無理も無いと思う。でも…

「落ち着け」

「…はっ！まさか…尊に落ち着け、って言われる日が来るとは思わなかったよ」

そう言いながらもかなめは少し落ち着いた様子だった。

そして揺られる事数分。ふいにがちゃりと扉が開いた。

にこつと紳士的な笑みを浮かべるその人を私は思わずまじまじと見てしまった。

ああ…この人、ちょっとあの人に似てるかも。

某小説の、超能力者の。あの人にちよつと…いや、物凄く似ていた。

「初めまして。ここが貴女達の通う学校ですよ」

その人は私達を丁寧の外まで連れ出し、学校に手の平を向けた。

「あ、はい…」

その豪華さに、思わず目を疑う。

私の何倍もありそうな門。私の家を幾つ足しても及ばなそうな校舎。
(何だこれはああああああああああ)

心の中に絶叫が響き渡る。ちなみに外面は某小説の長門並に無表情。
私我ながら良い特技持つてるなあ…。

「では、まずはクラスに行ってください。クラスが分からなくても、
校舎に入れば心優しい人が必ず教えてくださりますよ」

その人の良さそうな笑みは、こちらも思わず笑顔に成る程の代物だ
った。

「はい。ありがとうございました」

「では、私は失礼致します」

その人は車に乗り込むと、私達を置いてエンジンを鳴らして行った。
私とかなめの両手には荷物。荷物。荷物。

「重…」

「まずは教室、って言ってもさ…この荷物、持って行くの？」

私達は疑問に思いながら下駄箱に入った。

「…おお！」

かなめが感嘆の声を漏らす。下駄箱は思ったより数倍広かった。
下駄箱だけで教室三つ分は使ってるんじゃないかとすら思える。

私達は一応一年生だから、一年の下駄箱で名前を探す。

「無い？」

何故か無い。名前が無い。幾ら探しても見つからなかった。

どうしたんだろう、と呟くと、後ろから声が聞こえた。

「名前が無いの？」

振り返ると、そこには私もかなめも知っている、有名某小説のあの
人が立っていた。

いつの間にか（後書き）

この某小説、つてのはヘタリア全く関係ないです。

ただ単に私が好きだからです。

教師は全部この某小説の人達です。

でももう超能力者とか長門とか出てきてる時点で分かってる人多いかもしれない…。

某小説のあの人

口を結んで立っているのは、髪の毛をポニーテール、眉前の前髪と
いう、

(キ、

キョン子…だとおおおおお?!)

まさかの派生キャラ。声はキョンの声を高くしたとしか思えない可
愛らしさ。

「ええええええと、あのおお、名っ前、が、無いんですけどっ
「ああ、じゃあ貴女達はこっちの下駄箱使ってね。そっち側から入
れるから」

ポニーテールを翻して、キョン子…は靴を履くと、こっちこっち、
と手招きをした。重い荷物を抱えるようにしてキョン子についてい
く。

「ここね」

やけにでかい下駄箱が目に入った。さっきの下駄箱とは違う。何か
豪華だ。

「こっちは、特例のSクラスの人達だけが入れる下駄箱なの。あつ
ちに名前が無いんだったら、多分こっちな」

キョン子は私達の名前を聞くと、それを探し始めた。

「えっと…浅野尊、天道かなめ…ね。…あつたわ。こっちよ」
キョン子の手招きをする。

(…でけええええええ!)

下駄箱はさっきの都比べ物にならない程でかかった。

「寮と校舎が分かれてるのは知ってるわよね?校舎から寮に移動す

るときは、この下駄箱を通って移動するの。寮に勉強道具やらをいちいち持って帰らなくちゃいけないから面倒くさいけど、要らない物を持って来ちゃったらここに置いとけるから安心して。何か質問はある？」

キョン子が一息で言う。凄い肺活量だ。

「いえ…、あ、じゃあ、一つ」

かなめが悩んだ顔をして首を傾げる。

「Sクラスって…何で私達、入れたんですか？」

ああ、それは私も悩んでいた。

「…さあ？何でかしら？」

キョン子も首を傾げる。

「分からないんですか…」

「でも、Sクラスって結構特別なのよ。さっきも言った通り、特例、だから」

「そうなんですか…！ありがとうございます」

「いいえ。これからまた会うかも知れないからよろしくね」

キョン子はそう言うと微笑んだ。

とても柔和で清々しい顔だった。

Sクラスって

入って一番最初に目についたのは、美男美女のクラス。

(楽園やんなああああああああ！)

思わず叫びそうになるのを必死で堪え、言葉を飲み込む。

因みにさつき、キョン子が管理している部屋で制服に着替えさせてもらった。

って、それどころじゃない。

何、このクラス。

ドアの近くではくるんの方と大阪弁の方がお喋りしているし、クラスの本真ん中では金髪緑目の眉毛特徴人とウエーブの髪の毛の人がめっさ喧嘩してるし、その横ではそれを笑いながら見ている金髪碧眼の人物がいるし！

もう…そうか、天国はここにあったんだ！

萌え死ねる！！

「尊…」

かなめが私の思っていることを感じ取って、苦笑する。

「顔に出てる」

思わず顔が綻んでいた事を指摘され、驚く。

ごめん、と呟いて、自分の席にすんとん、と着く。

かなめは私と遠い自分の席に座ると、隣の席の人(もしかして…あれは…！)と話しだした。さて、私の隣は…。

駄目だ。これは話しが出来る訳ない。

(本格派俺の…嫁…だと…！)

隣の席には、私の嫁が…艶やかな黒髪の男子生徒が…くるんの方とお話していた！

Sクラスって（後書き）

ちよつと尊の喋り方、印象が分かってきた所でしょうか。

普通の他人に緊張はしないけど話すのは無理な反面、自分の好きな物にはとことん尽くす子です。

特に趣味に大しては…。

200上がった

(につさま…につさまじゃまいか…)

頭の中にどうしよう、どうしようと言葉が反響する。

すると、隣から動画再生サイトで聞き慣れた声が掛かる。

「どうしましたか？具合でも悪いですか？」

机に突っ伏していた私はぴよんと飛び跳ねるように起き上がった。

「はい大丈夫です！！！」

私今二次元に入ってる。何これ超幸せ。

「そうですか。私は隣の席の本田菊と申します。良かったらお見知り置きを」

にこつと微笑む。夢にまで見た笑顔が私に向けられている。

しかも人名ですか呼びやすい！ああもう駄目だ…。

そう思った途端、私は菊さんの手を取っていた。

「結婚してください！」

「はええ?!！」

「あーもうマジ萌える可愛いにつさま！大好きにつさま！あ、勿論フェリちゃんも大好きだけどにつさま俺の嫁すぐるー！」

「ちよつと待つて何で君俺の名前しってるの?!初対面だよね?!」

菊さんが反応するまえにくるんのお方が反応する。

やばいくるんのお方も可愛い！可愛すぎる！ああ俺の嫁パラダイス！

「ちよ、ちよつと待つてください！あの、私達初対面ですし、まだ私異性と付き合ったことも」

「異性として何ですかそこで強調しないでください！逆に萌えるー！」

異性としてことは同性とはあるってこと?!じゃあそれって前のくるんの方?!

「と、取り敢えず落ち着いてください！」

「…はっ！」

菊さんの声で目が覚める。

他のクラスメイトは二人組の喧嘩（ヒートアップ中。眉毛が髭を殴った）に注目し、こっちの出来事に気づいていない。

「あれ…？私…今何を…？」

首を傾げる。それからゆっくりと下に視線を落とし、私の手が菊さんの手を握っている事に気がついた。

「うわあああごめんなさい！」

思い出すと赤面しそんな発言の数々。これ私絶対嫌われてる…！

「…なんですか？」

「ふえ？」

教室の隅っこ（教室がでかいので隅が更に狭く感じる）にしゃがみこんでいると、菊さんが声を掛けてくれた。

「…アニメとか漫画、お好きなんですか？」

にこつと微笑みながら呟かれる言葉はまるで天使の言葉如く、私に降り注ぐ。

「…え？」

「私も好きなんですよ。よければこっちに来て、お話しませんか？」

にっさまへの好感度が200上がった瞬間だった。

担任も某小説

その後、菊さんと仲良くなった…というか、オタ話したただけだけど。くるんの方はついに最後まで話は分からない様子だったけど、次第に私に喋りかけてくれるようになった。

と、途中でチャイムが鳴る。

もう少しお話したかった、と少し惜しみつつ、前を向く。
私は目を丸くした。

(…この教師で大丈夫なのか…?!)

いや駄目だろう、大丈夫だ問題ないとは言えない、と心の中でツッコミながら教師を見る。

整えられたボブショート。気の強そうな目。

極めつけはオレンジ色のリボンカチューシャ！

「皆！入学おめでとう。あたしがこの1Sの担任になる、涼宮ハルヒよ」

というか何で教師は全員ハルヒなんだ…！、とツッコみつつ、菊さんを見る。

菊さんは無表情で、あくまで冷静だった。凄い…菊さんまでいくとこういうのも平気になるのか…！いや、菊さん自体が二次元の人だから平気か。

「一年生の行事のプリント配るから、一通り目通しとして。必要だったら寮、食堂にも張り出すわ」

一年の行事予定のプリントが配られてくる。何何、体育祭、文化祭はともかく…一年生で修学旅行？！もしかして二年も？！三年も？！

おかしい。何か…この学校は、おかしい。

「ヴェー。せんせ」

フェリちゃんが声を掛ける。可愛い…と無意識に思ってしまった。

「何かしら？」

涼宮先生（仮）はフェリちゃんの方をにっこり笑顔で向く。

「この修学旅行、なんですけど…」

「おやつにパスタは入りますか？」

「その前におやつ持ってきてきちゃいけません」

涼宮先生が嘆息する。この質問は意外だったのだろう。私は予想してたけど。

まあ、何はともあれ、楽しそうになりそうだから良いか。

うん…

その後、嫌な方向に楽しくなっていくのは予想できなかったけれど。

色々な人と

「ヴェー、ルート！お昼行こー！」

フェリちゃんがルートさんの席に駆けていく。

整えられたオールバック。あれはもう確定していいだろう。

「菊も行こーあ、尊ちゃんも来るー？」

「うん！行く行く！」

あの後。私とフェリちゃんと菊さんで他愛も無い話を沢山して、いつの間にかお昼。

「そういえばお腹空いたなあ……」

「尊さんはお弁当を持ってこなかったのですか？」

「ああ……いや、でも、入学するって決まったのが一昨日なんですよ……知ってるはず無いでしょう」

くう、と鳴るお腹を押さえて苦笑する。このままこの三人とお昼を共にしても辛いだらう。

「尊ー！私も入れてー！」

かなめがこつちに駆けてくる。

「はじめまして、三人共！私、かなめって言うんだ。尊の友達。よろしくね！」

いきなり超特急な自己紹介されて動じない人が居る、と信じてる人だなあ。かなめは相変わらず。

「ヴェー。よろしくね！俺はフェリシアーノ。気軽にフェリって呼んでよ！」

「よろしくお願いします。私は本田菊と言います」

「ルートヴィヒ・バイルシュミット。フェリシアーノや菊からはルートと呼ばれている」

動じない人居た。

色んな意味で凄すぎる。この三人は。

「うん！よろしく！」

かなめもにつこりと笑って返す。

「で、私は一応予備としてパン持ってきてるんだよねー」

「鬼！鬼畜！」

かなめはかなめだった。するとフェリちゃんが、

「ヴェー。尊ちゃん、よかったら俺の弁当分けてあげようか？」

「へ…？」

「ああ、それは良いですね。良ければ私も分けて差し上げますよ？」

「俺も、良ければ良い」

「え、良いんですか？良いの？」

皆真顔で頷いてくれる。

私このクラスで良かった…！！

心底そう思った瞬間だった。

新入生への陰謀

お昼ご飯を食べよう、とフェリちゃんが指定した場所は、学校の裏側の原っぱだった。

「ヴェー、朝来る時見つけたんだー」

フェリちゃんがブルーシートを広げる。準備良いなあ。食べ物に關しては。

その上に各々持ってきた弁当やら何やらを置き、その後に靴を脱いで座る。

「空のタッパーがありますので、フェリシアーノくん、ルートさん、ここに入れてあげてください」

菊さんはおにぎりをまるまる一個くれた。ルートさんはウルストを、そしてフェリちゃんは何かコロッケみたいなのを…

「…って、これ、何？」

「ヴェ、知らない？アランチーニっていうライスコロッケだよ」

「知らないよ！」

弁当が凄く凝っていた。この凝りよう。賞賛に値するだろう。

「フェリちゃんはいつも自分でご飯作ってるの？」

ライスコロッケを頬張りつつ、フェリちゃんに問う。

「ヴェー、俺が自分で作る事もあるし、兄ちゃんが作ってくれる時もあるよ。今日のは自分で作ったから、美味しいか分からないけど恥ずかしそうに笑う。十分美味しい。色んな意味で。」

そのままもくもくと会話をしながら食べていく。

この学園の昼休みは長く、すぐに食べ終わってしまい、結構時間が余った。

「春なのに…、もう十分温かいですね」

菊さんが桜の木を見上げながら言う。

桜の木の花びらは一枚一枚が折り重なっていて、自然の傘、と例えるのがぴったりかもしれない。しかしたまにあるその隙間から太陽

の光が注ぎ、とても幻想的な風景になっている。

「そろそろ帰りましょうか」

菊さんは立ち上がると、制服のズボンをはたいた。フェリちゃんは鼻歌を歌いながらシートを畳む。

温かい日差しは、私達、皆に注がれる。

「そういえば、そろそろテストが近いですね…」

「ヴェー、テストって…憂鬱だよー」

「へ…テスト…？」

テスト、という単語が頭の中で反響する。テスト…？はて…？

「新生テストがあるんだ。四月末に」

ルートさんが説明してくれる。ふむふむ。四月末に新生テストが…。

新生テスト…が…ある…?!

「嫌だあああ！」

「ど、どうしたんですか?!」

「テストなんて消えて無くなれ！とにかく私はやりたくないー！」

「分かる！分かるけど落ち着いて尊！」

かなめに落ち着け言われた。ちよつとショック。

私は落ち着きを取り戻すと、真剣に考えだした。

「落ち着くんだ、私…テスト勉強は三日前から始めるとして…」

「三日前?!?!」

フェリちゃんの叫びが聞こえる。しかし私の耳には入らない。

「五教科の合計点数は最大460点はいくから…」

「460?!?!?!」

「まあ、何とかなるよー」

「何とかかなりすぎだよ?!」

フェリちゃんが絶叫している。何を驚いているのやら。

「何驚いてるのー？止めてよ」

「この学園のテスト、結構難しいらしいんだけど…460…かあ…
一位狙えるね…」

フェリちゃんが何か呟いていた。

よく聞こえなかったけど、もしかして私の点数の事かなあ？

夕食の席で

「Hey you!ここ邪魔しても良いかい?」

夕食。食堂にて。流暢な言葉で菊さんに話しかけてきたのは、金髪碧眼のあの人。

「ああ、アルフレッドさん。どうぞ」

菊さんが隣の席に手の平を向ける。

「アルフレッドさん、こちら、浅野尊さんです」

「Oh!キミが例の菊の友達かい?俺はアルフレッド・F・ジョーンズさ!気軽にアルって呼んでくれればいいぞ!」

「え?あ?あ、うん…よろしく」

実際に見ると本当にハイテンションだった。うん、流石AKY…。

因みに今、フェリちゃんとルートさんは宿題の居残り(というかフェリちゃんが、だが)をされていて、夕食には降りてきていない。

私的には枢軸お花夫婦で別の可能性を考えても良い訳だが…敢えて言わないことにしておこう。

「おいアル。お前初対面の子にも容赦ねえのな」

「アーサーさん、フランシスさん。どうぞこちらへ」

菊さんが促すと、私はこちら側に一人、向こうに男達という何とも奇妙なものになった。

すると、私の前に一つの手が突き出された。

「初めまして。俺はアーサー・カークランド。好きに呼んでくれていいぞ」

「え?...あ、うん!よろしく」

アーサーと握手…と期待に胸躍らせていると、その手が誰かの手によって遮られた。

「どうもマドモアゼル。俺はフランシス・ボヌフォア。今度一緒にお茶でもいかがですか?」

「すいません私お茶飲めないんです」

兄ちゃんが好きだけどお茶が飲めないのは本当。ごめんなさい。

「えーつと…二人とも？」

やんのかコラア、という声が響く中、控えめに話しかける。

「…私は浅野尊。よろしく」

にこつと笑って手を差し出す。えつと、こんな感じかな…？

「…！！」

しゅばつ、と擬音が聞こえそうなくらい素早く手が差し出される。

…両者の。

菊さんがはぁー、と溜め息を吐くと、アーサーとフランシスの手を制した。凄い。凄い。

「落ち着いてください。尊さん困っていますよ？レディを困らせないのは紳士では無かったですか？アーサーさん」

「うっ…それは…そうだけども」

アーサーの手がすつと引かれる。

「お嬢さんには優しく、が基本でしょう？フランシスさん」

「…はい…」

フランシスの手もすつと引かれる。

これは…菊さん、お母さんだ…。

「悪かった。ごめんな、尊」

「え、うん？いいよ」

ちよつと他の事考えていた。アーサーの言葉が全く耳に入ってこなかった。

「俺も、ちよつと張り切りすぎてたらしい…」

「いいっていいって。気にしないで」

二人に謝られる。いやいや、

しよぼーんとした二人が見ただけで大満足だから！！

心の底では思っている、敢えて口には出さなかった。

尊ちゃん気づいてないみたいだけど、鏡見たら分かると思うよ…
それで、今から食堂に来れるかな？
できればTシャツ、ズボンで来てほしいな…
この時間なら誰も来てないはずだから。

鏡？食堂…？

しかも、何で服装の指定まで？

私は一瞬戸惑ってから、顔を洗うために一部屋ずつ付いている洗面所へと向かう。

蛇口を捻ると冷たい水が流れ出し、私の目を覚まさせた。

ついでに鏡を見る。

気の抜けた顔。この前始めて現実世界で見た顔。何より私の頭から生えているはずのないそのくるん。

「うわあああああああああ？！…！！！」

起きてから初めて出た声はいつもの高い声では無かったのは、言うまでもない。

食堂での私と私

私はTシャツと手近なジーンズを履いた。外に出ようとしたら、まだ春だというのに肌寒く薄暗かった。

時計を見ると、まだ時刻は朝の三時半を指していた。

「寒っ……」

まだ自分の口から出る声に慣れない。いや、慣れちゃいけないのだが。

取り敢えず筆筒の上にあつたジャケットを羽織る。

外に出て、寮棟の一階にある（寮は二階、三階にある）食堂に下りていく。

食堂のドアを開けると、木が軋む音がした。

フェリちゃんは居るだろうか。

不安を抱いてドアを更に押し開ける。

「あ、おはよう、俺ー」

すると、今や私の姿となったフェリちゃんが、私に呼びかけてくれた。

「あ……わ……私だあー！」

そのまま駆けて「私」に抱きつく。

「うわあ?!」

フェリちゃんが驚く。だって……だって……私が……!

少しして、私……フェリちゃんから離れる。

「それにしても、どうしてこんな事……」

「……さあ？俺にも分からない……」

「私」の声でフェリちゃんが「俺」と言うのがちよつと新鮮。

「心が入れ替わった……って感じじゃないよね。起きたら自分の部屋だったし……」

私が目覚めたら私の部屋で、携帯も何もかも私の物だった。

「でも、まずは…皆に信じてもらえるか…だよ…」

「そうかも…」

フェリちゃんの言葉に同意する。

皆が信じてくれる可能性は悉く低い。これは現実で起こりうる事ではないから。現実で身体が入れ替わる、なんて事がある訳がないからだ。

そうこうしているうちに、低く時計が鳴った。

「っと、もう五時だ。この時間になると結構起きてる生徒多いんだ。

俺、尊ちゃんの部屋入っても大丈夫かな？」

「へ？何で？」

「だって、俺が俺の部屋に居たら、イコール尊ちゃんが俺の部屋に居る事になっちゃうでしょ？見た目だけだけど」

「あ、そうか…」

私は自分の部屋の情景を思い浮かべる。

まだ荷物の整理はしてないから、ダンボール箱がいくつもある。オタク物は一つも出してなかったはずだから大丈夫だ。

「うん。いいよ。制服はベッドの横に掛けてあるから。201号室だよ」

「そう？分かった。俺の制服は箆笥に掛けてあるよ。俺の部屋は6号室だよ！」

じゃあまた後で、とフェリちゃんは言うと、階段を駆け上っていった。

それにしても、6号室か。随分と離れてるな…部屋。

この学園は部屋のドアに何号室か書いてある普通のタイプなのだが、名前が無いので間違えて入ったら終わりだ。

考え事をしながら歩いていたら、意外に早くついた。

フェリちゃんの、部屋…！k t k r！

今思ったが、これって物凄い俺得なんじゃないだろうか。
ドアノブを捻る。かちやり、と小さな音を立てて部屋が開く。
意外にきちんと整理された綺麗な部屋だった。
ただ、何故か…

紅茶の山があつたのは見なかった事にしよう。ツッコムとアーサー
ーが関係しそうだから。

兄ちゃんとフェリ

その後、私は二度寝した。

フェリちゃんに起こされて、何より眠さが私の頭を占領していたからだ。

夢で、フェリちゃんの心の中を見た。

内容は何て事の無い、ただの食品にまつわる夢。

どうやら身体が入れ替わると、夢の中身も入れ替わるようだ。

じゃあ私のオタク夢はどうなるんだろう、と物凄く心配になった。

起きたら六時だった。私は伸びをして、再びこの身体が自分の物では無い事を実感する。

寒気がする。

さつきも寒かったが、一段と寒くなっている気がする。

「寒い……」

私はエアコンの暖房を少し入れながら、フェリちゃんの箆笥からジーンズとシャツを拝借する。朝の食事は食堂だが、食堂には私服で行っても良い事になっている。

「うっ……」

それにしてもフェリちゃんはお洒落だ。色々な服がある。

寒くないように重ね着をして、尚且つ変に見えないようにコーディネートする。

「ふう」

一応携帯はあの時交換しておいたので、私の手にあるのはフェリちゃんの携帯。勝手に開けるのはマズいし、フェリちゃんも私の携帯を開く事は無いと信じてやった携帯交換だ。

すると、私の手にある携帯が軽快な音楽を鳴らした。

もともと携帯にあった音楽の様で、少し意外に思いながら、チカチカ光っている携帯の折り畳まれた場所を見る。

『兄ちゃん』

開けるのはマズい、と心底思った。

「…どうしょ…」

取り敢えず、フェリちゃん宛てのメールは見ないまま、私の携帯に電話を掛ける。

『ciao、尊ちゃん!どうかした?』

「いや、フェリちゃんの携帯にお兄さん宛てでメールが来たんだけど」

『ああ、兄ちゃんから?開けても大丈夫だよ。返信しなくても良いメールだから』

「へ…良いの?」

ちよつと困惑する。返信しなくても良いメールって…。

『只のおはようメールだから。毎日送りつけてくるんだよね』

可愛すぎるぜ畜生つつつ!

「そっかー。分かった。ありがとう」

『うん。兄ちゃんちよつとおかしいから気をつ』

フェリちゃんという言葉を遮り、声に出さないようにしながらそそくさと電話を切つて、着信メール画面に移る。

from・兄ちゃん

おいこの腐れ弟

俺の送ったトマトが美味すぎて昨日寝すぎて遅刻しろばーか!

ばーかばーか

…何このやり取り。ロヴィさんフェリちゃんにトマト送ったの?

可愛い…!可愛すぎる…!

私はふわふわな幸せ感に浸りながら携帯を閉じた。

「まあ…これはこれで…いっか」

私は眩くと、6号室のドアを開けた。

学園の校則より抜粋

時間割

入浴	—	〆 06:00	入浴場
入浴しても良い。			
入浴時間は昨晚20:30〆からの引き継ぎである			
起床	—	〆 06:30	寮
休む理由がある場合、寮長かルームメイトに連絡			
朝食	—	06:40〆07:30	食堂
欠席をとるので、その時に居なければならぬ			
身支度	—	07:40〆07:50	寮
制服に着替えること			
HR	—	08:00〆08:20	各教室
遅れてはいけぬ			
1時限目	—	08:30〆09:20	各教室・移動教室
短い休み時間。寮に戻るときは素早く帰つてくること。全部の時間の間にある休み。10分間。			
2時限目	—	09:30〆10:20	各教室・移動教室
短い休み時間			
3時限目	—	10:30〆11:20	各教室・移動教室
短い休み時間			
4時限目	—	11:30〆12:20	各教室・移動教室
短い休み時間			
昼食	—	12:30〆13:30	各場所
各場所での昼食。学校外は禁止			
自由行動	—	13:35〆14:00	各場所
外には出てても良いが、学校から出ぬこと			

清掃 — 14:05～14:20 各場所

各自の持ち場所での掃除、及び学校全体の大掃除（夏休み前等）

5時限目 — 14:30～15:20 各教室・移動教室

短い休み時間

6時限目 — 15:30～16:20 各教室・移動教室

短い休み時間

部活動 — 16:25～ 各場所

休む理由の報告は顧問か、部活動の同級生。理由無しで帰っても良い

自由行動 — 18:00～18:15 各場所

外に出てはいけない。尚、この自由行動で私服に着替えておくこと

7時限目 — 18:20～18:55 各教室・移動教室

この科目は、ある時と無い時がある。無いときは自由行動

夕食 — 19:00～19:50 食堂

欠席をとる。必ずこの場に居る事

身支度 — 20:00～20:20 寮

風呂へ入るためのタオル、寝間着などを持って入浴場へ行く

入浴 — 20:30～ 入浴場

長風呂はしないこと。但し、入浴は夜でもよい

就寝 — 各時間

夜更かしは禁物。朝早く起きられるように、早目に就寝すること

1年担任

1年Sクラス担任 涼宮 ハルヒ すずみや はるひ 女

1年Aクラス担任 朝比奈みくる あさひな みくる 女

1年Bクラス担任 古泉 一樹 こいずみ いつき 男

1年Cクラス担任 朝倉 涼子 あさくらりょうこ 女

各教科担当 各教科でジャージまたは体操服に着替える事

1年	美術担当	古泉	一樹	こいずみ	いつき	男
	ジャージまたは体操服					
1年	体育担当	涼宮	ハルヒ	すずみや	はるひ	女
	ジャージまたは体操服					
1年	英語担当	涼宮	ハルヒ	すずみや	はるひ	女
	制服・ジャージまたは体操服					
1年	数学担当	朝比奈みくる	あさひな	みくる		女
	制服・ジャージまたは体操服					
1年	技術担当	朝倉	涼子	あさくらりょうこ		女
	ジャージまたは体操服					
1年	国語担当	長門	有希	ながと	ゆき	女
	制服・ジャージまたは体操服					
1年	理科担当	古泉	一樹	こいずみ	いつき	男
	ジャージまたは体操服					
1年	社会担当	古泉	一樹	こいずみ	いつき	男
	制服・ジャージまたは体操服					
1年	総合担当	各クラス担任				
	制服・ジャージまたは体操服					
1年	道徳担当	各クラス担任				
	制服・ジャージまたは体操服					

校訓

友情

友との友情を大いに育むこと。
喧嘩、訴訟、虐め行為は禁止する。

勉学

勉学に大いに励むこと。
理由もなく休む行為などは一切禁止する。

健康

健康であること。

体調不良であれば寮で静かに過ごしてよい。

寮という生活の中で、友との友情を育み、勉学に大いに励み、健康な生活を送ること。

それが我が校の校訓である。

学園の校則より抜粋（後書き）

私のホームページでの、前作品からの抜粋です。
心当たりのある人は凄い！
そして教師が全員ハルヒ。

何をしたら

六号室のドアを開けると、外はまだひんやりと冷たい風が吹き、身体を貫いた。

そのまま服のポケットに手を突っ込んでマフラーに顔を埋めながら階段を下りて行く。

食堂のドアを開けると、誰も居なかった。

「寒い…」

マフラーを外して広げると、丁度マフラーはふわりと広がって、肩に掛けられる程度の大きさとなった。

マフラーをポンチョ代わりにして、椅子に座って他の人が来るのを待つ。

少しすると、食堂のドアがきい、と音を立てて開いた。

「おや。お早いですね。ご飯は召し上がらないのですか？いつもなら真っ先に取りに行きますのに」

菊さんが立っていた。菊さんはジャケットにジーンズという普通の格好だった。てっきり和服かと勝手に思っていたが。

「あ…」

こんな時、フェリちゃんはどうするだろうか？こんな時、フェリちゃんはどう声を掛けるのだろうか？いつも見慣れた、パソコンの中で見慣れていた言動が私の頭から抹消されたかのように、話しかけ方が蘇ってこない。

「？どうかしましたか？」

「え、えっと…」

何と言えればいいのだろう。何て言えば良いのだろう。すると、食堂のドアがきい、と開いて、

「菊ー。それ、俺じゃないよ」

変な発言をする、「私」…もとい、フェリちゃんが現れた。

「へ…？…え？どういことですか…？何を、言ってるんでしょうか？」

「普通の人」の反応。何を言っているのか、分からないという表情でも、菊さんなら。

菊さんなら、分かってくれと信じて、私とフェリちゃんは全てを話した。

「そう…ですか」

菊さんが俯く。

「…良いんじゃないですか？お二人が私を騙してるとは見えませんが、…何でも私がこういう展開好きですし…」

「へ？何？」

「いえ、何でも。では、皆さんには私が説明しておきますよ」

最後に菊さんが何かをぼそぼそ言ったのは聞き取れなかった。何？何て言ったの？

「おや、最初に真実を知る方が来たようです」

ドアは静かに開き、私達の真実を知る人々を増やしていった。

そして、殆どの人達が、私達の事情を信じてくれた。

「でもそれって、入れ替わりはフェリシアーノさんだけで起こる事では無さそうですね」

「だよ。…俺もそんな気がするし…」

「うん」

確かに、この入れ替わりは私とフェリちゃんの間だけで起こる事では無い、と思う。

何か入れ替わる切っ掛けがあったという訳でも無いから、多分そうだろう。

何で入れ替わるようになったんだろう？

生の照れ隠し

何で入れ替わるのかも分からないまま、私とフェリちゃんの事情を知っている人達の代表…あくまで代表だが…を集めて朝食を食べた。その後、教室にて、その代表者で話をしている。

「入れ替わりはフェリと尊の間で起こる訳では無い、と。そうか…」
アーサーが俯く。そして顔を上げて、ぼん、と手を打った。

「じゃあ、いつ誰に入れ替わっても良いように、常に生徒手帳を携帯した方が良くないか？」

「へ？」

生徒手帳？

アーサーは続ける。

「ああ。何かの弾みで入れ替わったら、それが誰なのか分からねえといけないだろ？生徒手帳なら、見れば誰だかすぐ分かるし」

「ああ、なるほど！」

そう言つて、皆生徒手帳を取り出す。つて、いつも携帯してるんだ…偉いな。

制服の胸ポケットにぴったり合う大きさの生徒手帳。みんなの胸ポケットにちゃんと入っている。

「これって、私もやった方が良いのかな？」

かなめが疑問顔で言う。

「はい。入れた方が良いでしょう。かなめさんと尊さんは昔から知り合いらしいので入れ替わってもすぐ分かるでしょうが、一応、と言う事で」

「そっか。じゃあ入れとく」

かなめまで生徒手帳を携帯していた。私：生徒手帳、どうしたっけ？フェリちゃんの生徒手帳は上着の内ポケットに入っていたから良いけれど。

「フェリちゃん、私の生徒手帳見なかった？」

「尊ちゃんの生徒手帳なら、最初から胸ポケットに入ってたよ」
「そっか。ありがと」

すると、アーサーが訝しげにこちらを睨んできた。

「…えーっと…何？」

「…いや。何でも」

アーサーは顔をぱつと背けると、俯いた。

「…なんでフェリなんだよ…」

「へ？何？何だって？」

何か怒ってるようにも見える。何？私、何かしたかな…。

「へえー。そう、坊ちゃんのくせにねえ」

一人だけ事情を理解してるらしいフランススが、アーサーに話しかける。

するとアーサーは真っ赤になってフランススに向けて怒鳴った。

「ばっ、お前、何言ってる」

「ああー大丈夫大丈夫。照れ隠しは受け付けないからー」

「な、~~~~~ばかあ！」

何？何が？

何があつたのかは知らない。知らないけど…

生「ばかあ！」が見れただけで超幸せ

「尊さん…」

「尊…」

菊さんとかなめがこちらを向いて苦笑する。

アーサーとフランススの喧嘩は、涼宮先生が来るまで続いた。

入れ替わる原因

眠い。

朝と一転して、ほかほかという陽気が私に降り注いでいる。

睡魔が私に呼びかけ、朝比奈先生（仮）の声が子守唄の様に私の頭に反響する。

「…なので、 の値は…になります。では…」

すみません、朝比奈先生。授業の内容も、全く頭に入ってきてません。「ん…」

少しでも眠気を覚まそうとするが、全然目が覚めない。

欠伸をすると、ほろっと涙が出てきた。そのまま涙は下に落ち、私の足に落ちる。

（…あれ？今、）

今、何が、と思った所で目が覚めた。

下を見ると、私の足。ズボンでは無く、スカートの。

「…え？」

素早く胸ポケットから生徒手帳を取り出す。

そこにはきちんと、「浅野尊」の文字が綴られていた。

（何が…？…？…？）

後ろを振り返ると、フェリちゃんがぱちぱちと瞬きをしていた。菊さんは驚いたように私とフェリちゃんを見回している。

一時間位ならバレないだろ、と思い授業を続けたら、本当にバレなかった。

心底、隣の席が居眠りしてて良かったと思った。

「ふぁー。何で入れ替わって…？」

フェリちゃんが私に問う。私もよく分からないが、もしかしたら…？

「私、入れ替わる前に欠伸した」

「欠伸い？」

フエリちゃんが首を傾げる。

「そう。欠伸」

私はちよつと待ってて、と言うと、口に手を当てて、ふぁ、と欠伸をした。

パチ、と目を開けると、さっきと違うのは席が移動していないこと。

「ふえ？あれ？」

「…どうやら、今度は私と、心が入れ替わったようですね…」

菊さん…私の姿をした菊さんが、そう呟く。

「やっぱり私の想像した通りです。この出来事は…きつと、全てがランダムなんですよ。入れ替わる人もランダム、心か身体が入れ替わるかもランダム。全て、何もかもがランダムなんですよ」

「ランダム…！」

私は頑張つて、もう一度欠伸をした。ぱつと景色が切り替わる。

「まあ、暫くは欠伸を控えた方が良いでしょう。誰に入れ替わるか分かりませんから」

確かに、私もいきなり入れ替わるのは困る。

まずは欠伸を控える事から始めよう。そこから治す方法を見つけていこう。

そう結論付けると、思考の終焉を意味するかのようには鐘が鳴った。

アルフレッド/尊

技術の時間。カチカチとパソコンを弄り、学校関係の資料を生徒それぞれが作成している。

多目的パソコン室の一番前では、朝倉先生（仮）が自分自身の仕事をしていた。

生徒達は皆好きな人同士で組んでパソコンをやっている。

ちなみに私は菊さん、フェリちゃん、ルートさん、かなめの五人でやっている。

私がカチカチとパソコンを弄り（慣れてるから）菊さんが良いサイトを教えてくれ（慣れてるから）、ルートさんがプリントしに行き（慣れてるから）かなめがそれをチェックする（慣れてるから）。

ちなみにフェリちゃんはシエスタ中だ。慣れてるから…。

「んー…肩が凝るう」

ちなみに多目的パソコン室はざわざわとされていて、声が混じり合っ
て雑音と化している。

腕を伸ばして身体も伸ばすと、肩がこきこきと良い音を鳴らす。
それに乗じて、私は自分自身で禁じていたリミッターを外した。

「…っ、尊さん、欠伸はー…」

「へ…？…あ！」

気づいた瞬間、景色がぱつと切り替わる。

へ？…ここ、どこ？

景色が変わった所を見ると、今度は心が入れ替わったのだろう。
見たところ、パソコン室では無い。

それどころか、音が無い。

その前に、これが誰だか確認しないとー…、

「どこ行くんだい？」

聞き慣れた声。えっと、今のって…私に言ったんだよね…？
振り返ると、眉間に薄く皺を寄せたアルが立っていた。

「え、つと…?」

自分の口から出る声で、誰か判断しようとする。しかし、この短い一言ではそれもままならない。その前に、このアルの雰囲気に吞まれて、耳が正常に作動してないって言うのもあるかもしれないが。

「さっきの返事。まだ聞いてないだろ?」

「返事…?」

残念ながら、私は今の今までパソコン室に居た。だから、その質問の内容も知らない。

アルは私の肩を掴んでこっちに顔を向かせる。

綺麗な碧眼。

蒼い瞳が私の目の前を埋め尽くす。

「ねえ、

返事は?アーサー」

あ…

アーサー…?

一瞬の判断力の前に、私の瞬発力がそれを凌駕する。右手でアルの口を塞ぎ、左手で生徒手帳を確認する。

アーサー・カーランド

「あ、アーサーなんだ…今度は」

「?…??…?!」

アルが混乱したように右手を剥がす。

「あ、アーサー…じゃ、ないのかい?!」

「あ、えっと…さっきまた入れ替わっちゃったみたいでさ…、私、尊」

自分自身を指差して、私の名前を言う。

アルが口をぱくぱくさせながら木に凭れ掛かり、はー、と大きな溜め息を吐いた。

「あー…、事情、分かった?」

「へ？何も？」

反射的に返事をする。本当はもう分かっただけはいるんだけど。

「あ、あー…アル？」

話しかけに行くと、アルは腕の中に埋めた真つ赤な顔を上げた。

「…アル？」

「ごめん！尊が悪い訳じゃないけど、ごめん…、事情察知してる…

よね？」

「…え…」

さあ。

果たして、ここで私は何と言うべきだったのか。

分からないまま。ぼーっとしたまま返事をした。

すると、アルは立ち上がり、俯いて呟くように言った。

「…そっか」

顔を上げた顔に、いつものヒーローズスマイルは消えていた。

「…そうだよな」

「…へ…？」

アルの顔は明らかに一瞬冷たくなり、そのまま後ろを向いて去っていく。

「…あ、アル…?!」

そのままアルが振り返ることは無かった。

アルフレッドノ尊(後書き)

なんか長い。

生じたズレ

ふらつく頭を立ち直らせながら、多目的パソコン室へ急ぐ。あそこは寮棟裏だったようで、下駄箱まで行くのに迷いはしなかった。

ただ…迷ったのが、アーサーの下駄箱だ。

何処にあるのか、いくら探しても見つからない。

すると、誰かが走ってくる音がし、ついでに声が聞こえてきた。

「…尊！」

「…アーサー？」

廊下から走ってくる音。「私」が姿を現す。

その後から菊さんとフェリちゃんも走ってきているようで、少し遠くだが足音が聞こえた。

「良かった…尊、アルに何かされなかったか?!大丈夫だったか?!」

「ちょっと待ってよ…アーサー」

「私」の肩を掴んで、こつちを向かせる。

だんだん足音が近くなってくる。もうすぐで着くだろう。その前に、聞いておかなくちゃいけない。

「アルと、何があったの？」

「…っ」

「私」は視線を下に落とすと、ぼそっと呟いた。

「…何も」

私はその肩を離す。目線だけは、しっかりとアーサーを見据えたまま。

「尊さん！」

「尊ちゃん…って、アーサー…?どうしたの?!」

菊さんとフェリちゃんが走ってきた瞬間、アーサーはその場に座り込んだ。

「俺が…俺が、…、」

最後に何を呟いたかは分からなかったが、ふっ、と私の意識が途切れ、私もその場に座り込むように、倒れた。

「アーサー？」

目を開けると、目の前にはフェリちゃんの顔があった。

「うわあああああ？！」

「何いいいいい?!」

フェリちゃんも目を見開いて驚いている。

そして、私は自分の口から出る声に気がついた。

「あ、あれ？私…」

「へ？何？…もしかして、アーサーじゃない？」

胸ポケットから生徒手帳を取り出して確認すると、きちんと 浅野 尊 の文字が刻まれていた。

「私…？私の身体？…欠伸はしてないはず…」

すると、カラカラとドアが開き、菊さんが姿を見せた。

「あ、起きましたか。おはようございます、と言ってもまだ夕方ですが」

「あ、あの、菊さん、何で…欠伸もしてないのに…」

頭の中が混乱して、何と言っているのか分からない。

すると菊さんは、ああ、と言って呟く。

「それは多分、拒絶反応ですね」

「きよぜ…?」

フェリちゃんが首を傾げる。

私もあまり分からなかったが、菊さんが細かく説明を始める。

「拒絶反応…心と身体のスレ、とでも言った方が良いでしょうか。」

つまり、その人の身体に合っていない事を心が思うと、心と身体にズレが生じてしまいますね？」

「あ、うん…そうなるのかな」

フェリちゃんは相槌を打つ。なんだかんだで飲み込みは早い方なんだろう。

「そして、身体は心の事を拒絶する。自分の外から出そうとします。それは、違う人の心が自分の身体に入った時に起こる反応だと思われれます。その時は心が入れ替わっていますから、当然心が入れ替わるだけに終わります」

すると、菊さんははあ、と溜め息を吐いた。

「しかし、これが厄介なんですよ…もし、自分自身の心と身体が拒絶反応を起こしたらどうなるのか、という所が」

「…あ…」

フェリちゃんが小さく声を上げて俯いた。

「もう…戻れない。自分の身体に、戻れなくなるんです」

日の当たる部屋で

「へえ、アルフレッドが、ね」

午後。生徒会室にて。

良い香りのする紅茶を一啜りすると、フランスはそう呟いた。

「そうなの。何か心当たりとか、ある？」

「まあ…、無い事は無いけど…。二人とも、今日はまだ一度もここに来てないからね…」

勿論、アルの様子の話だ。

私が入れ替わってからの一部始終を話すと、フランスは腕を組んで考え込んでしまった。

それからの今、という訳だ。

「じゃあさ…尊ちゃんは、その時なんて答えたか覚えてる？」

「その時…？」

自分でもぼーっとしていたため、はっきりとした記憶は無い。ただ、口が何と言葉を紡いだかを、ぼんやりとだが思い出せる気がする。

アールグレイの香りを嗅ぎながら、私は記憶を掘り起こす。

「えっと…確か、…『何も』…だった、気がする…」

そう言うと、フランスははあー、と溜め息を吐いた。

「それが駄目だったんだね」

「へ…？」

どういう事、と言う前に、フランスの言葉が被さってくる。

「アルはね。」

嘔吐く人が嫌いなんだよ」

ああ、と一瞬で理解してしまった。

アルは私が嘘を吐いている事を理解していた。

「アルは嘔吐くことも嫌いだし、嘔吐かれることも嫌い。つまりは

そういう事」

「…じゃあ、私は…、どうすれば良いんだろう」
顔を伏せたら、思わず涙がこぼれそうになった。
アルに嫌われた。

すると、温かい手が頭に乗った。

「悲しい？」

「……っ、うん……」

「そっか。なら、泣いても良いよ」

横目でフランススを見ると、ふわりとした笑みで微笑んでくれた。

その笑みに心を委ねると、頬にぼろぼろと雫が伝った。

何でだろう。

すごく、安心する。

「アルはもう大丈夫。いつものように、いつもの尊ちゃんて話しかけてみて。きっと普通に返してくれるから」

「…、うん…。ありがと」

「どういたしまして」

その後、フランススは再び私に温かい紅茶を一杯いれてくれた。
アーサーのように、とっても美味しくは無かったけど。

ふわりと、心が温かくなった。

光の向こう(前書き)

遅くなつてすいませんでした!!
やっと次話を考えました!!。

光の向う

寮の前の廊下で、かなめと一緒に歩きながら話をする。

「…で、それで……あれ？」

「?どうしたの？」

かなめがスカートのポケットから携帯を取り出す。

「電話掛かってきた。ちよっと待って……」

「うん」

かなめが携帯を開いて耳に当てる。

「もしもし？」

私はその間、かなめの話が終わるのを待とうと思いい、近くの壁に凭れ掛かる。

「あ、お母さん?元気？」

どうやら電話の相手は放任主義なお母さんのようだ。

何か心配事でもあったのか、とかなめが聞く。

「…へ？」

かなめの顔が徐々に険しくなる。

…何?何があったの?

「…そつか。分かった」

かなめが携帯を閉じる。

「何があったの？」

かなめの顔は険しく、悲しみの色を纏っていた。

「…お父さんが、急死した」

「…へ……」

かなめは俯くと、呟くように言葉を紡いだ。

「…過労だって。だから、私…」

帰らなきゃいけない」

かなめの顔を予想することはできないけれど。

今のかなめが悲しい顔をしていることはすぐに分かった。

「かなめ」

かなめが顔を上げる。

「私達、友達だよ」

私は無理にでも、引きつってても良い。笑顔を作ろうとした。

やっとできた笑顔が上手くいってるかは分からない。

…でも。

「絶対忘れてたりしないから。かなめを忘れてたりしない」

忘れちゃいけない。

「うん…、私も忘れない。短かったけど、この学園を忘れてたりしないよ」

かなめは泣き笑いのような顔になったけれど。

きつとここが終わりじゃない。

ここが私達の始まり。

ここが本当のスタート地点だ。

光の向日葵（後書き）

かなめはやっぱりめんどくさかつたんで省きました。

適当な作者ですいません！！

しかし尊…お前それで良いのか。

尊ノアルフレッド

夜。夕食時の、七時十分頃。

「あ、あ、ありゅッ」

「はえ？」

声がおかしくなってしまった！

こちらを振り返ったアルはにこつと微笑みを浮かべていて、それが逆に心に刺さる。

「どうしたの？」

「え、えつと…」

どうしよう。特に何も考えてなかった。

「や、やっぱ何でもない！」

「?...何か、変だよ？」

貴方のせいだけど、そこは敢えてつつこまないでおく。

すると空気を読んで菊さんが話しかけてくれた。菊さんg。]

「お二人、夕食はどうしましたか？食べましょう」

「あ、はい…」

「菊ー、尊が変なんだぞ」

「尊さんが？」

菊さんがこつちを見る。私が何でも無いですオーラを出すと、どうやら分かってくれたそうだ。

さすが趣味のKY（空気読み）。菊さんは苦笑すると、私の手を取った。

「尊さんは何ともないですよ。ほら、食事に行きましょう」

ミスター本田、ちよつと手。手。

「今日こそハンバーガーが入荷しといてほしいんだぞ！」

アルがふざけた調子で笑いながら言う。

これで良かった。

これで良かったんだ。

フランススの言った通り、アルはアルだった。そうだ。

顔を上げると、一気に世界に色が付いたような気がした。明るい。

今迄悩んでいたのが嘘のように気分が軽くなって、世界が明るい。

菊さんが私の手を離して、私にしか聞こえないように呟いた。

「もう大丈夫ですか？」

「…はい」

にこつと微笑む。すると、菊さんも微笑み返してくれた。

「二人ともー、何してるんだい？」

「うん、今行くよー！」

白い大理石のタイルを踏みしめる。

ここが私の居るべき場所なんだ。

これからも喧嘩することも、友情を誓い合うこともあるだろう。

それでも私はここを離れない。

離れたくないという自分の意志に背きたくない。

尊ノアルフレッド（後書き）

かなめのことは忘れてください。
でもこっから出番が一切無いつて訳では無いです。

「テ」のつくアレ

「はえ？」

次の日の朝、教室の扉を開くと、全員が何かのプリントやらを持って勉強していた。えっと…？

そのまま席に着く。

「菊さん、菊さん」

「はい？」

「皆…何をしてるんですか？」

「…へ？」

フェリちゃんにまで驚いた顔で見られた。くやしい。

「皆テスト勉強してるんだよ。ほら、今日が4月12でしょ？テストは26だから」

ああ、そういえばテストがあるんだっけ。

「で、教卓にテスト範囲表が1人1枚あるから」

「あ、うん。ありがとう」

範囲表を取りに前まで歩いて行く。

かさ、と小さな音を立てて紙を取り上げる。

中学の復習程度の問題量だ。なんて事は無い…と思う。

「えっと…」

席に戻って、改めてプリントを見直す。

「そんなに急ぐ位の量かなあ…」

フェリちゃんと菊さんが一気にこっちを向いた。

「へ？え？！何？…何？！」

「…ほんとに？」

フェリちゃんが凄く驚いた顔をしていた。…へ？何？何が？

「凄いですね…これで、『急ぐ程の量』とは」

結局二人の勉強を引き受けてしまった。何してんだろ、私。

テスト勉強と

夜、夕食後。

私の部屋のチャイムが鳴った。

というか…このチャイム、ピアノの音？もしかしてあの人が演奏してる？

勿論、訪問者は分かっている。

「ciao！俺だよ、尊ちゃん」

「はい。入って良いよー」

一応部屋は綺麗にしてある。

自分が綺麗好きって事もあるが、無論何時誰と入れ替わっても大丈夫なようにだ。

「ヴェー。部屋綺麗だね」

「まあねー」

「お邪魔します」

三者三様の反応を示しながら部屋の奥に入っていく。

「じゃあ、ここに適当に座ってよ」

小さいテーブルの前に座る。

「じゃ、早速始めよっか」

「ねえ、何か必要な物とかある？」

フェリちゃんが私に聞いてくる。

「うーん、特には…あ、ノートが要るかな」

「菊、ノートある？」

「いえ、残念ながら持ち合わせていません。どちらかというと参考書などを沢山持ってきてしまったので…」

そっか、確かにテスト勉強という参考書とかの方がやりやすいと思っただろう。

すると、フェリちゃんにこっと微笑む。

「そっか。じゃあ、これ使って良いよ」。俺2つ持ってるからさ！」

「ありがとございます。じゃあ使わせて頂きますね」

何このほのぼの雰囲気！可愛い！激写したい！！

「で、何をすればいいの？」

「えっと、今から私が問題を出すから、それをノートに写して解いてって。分からなかったら聞いていいから」

「分かった。じゃあ良いよ」

フェリちゃんが承諾してくれたので、私は問題を紡いでいった。

「け、結構難しいですね」

「これ、結構出るんですよ。頑張ってください」

次々と繰り出す問題は一応出される可能性の高い物だ。

私は何時間か勉強した後で、手を一度鳴らした。

ぱっ、と目が覚めたように二人が顔を上げる。

「今日はここまで」

はぁー、と溜め息が吐かれる。

「何だか、異様に疲れたよ俺…」

「私もです…」

あ、そうだ、と呟いてフェリちゃんが人差し指を突き立てる。

この時は…まだ良かったんだけど。

「二人とも、今俺が凄いいきなゲームがあるんだけどさ」

この発言が、こんなことを引き起こすとは。

何時、何処、何、誰

「何時、何処で、っていうゲームなんだけど。知ってる？」

「いえ。存じていませんね」

菊さんが首を振る。私も知らない。

するとフェリちゃんは一定の長さに切りそろえられた何枚もの紙を取り出した。

「この四つの束に分けられた紙に、『何時』『何処』『誰が』『何した』っていう項目を書き込むんだよ。そこからランダムに引いてって、最後にできあがった文章を読むの」

「それは…何と言うか、えきせんとりつくくなゲームですね」

「今さらつと酷いこと言ったよね」

「で、それに書き込んでくの？」

「うん。でも項目が多い方が楽しいでしょ？だから今回は…」

そう言っつてフェリちゃんが鞆からも一つ一つの束を取り出す。

「『誰に』の項目を増やすよ！」

「では、『何時』『何処』『誰が』『誰に』『何した』になる訳ですね」

「うん、そう！」

よし、だんだんこのゲームの旨が分かってきた。

するとフェリちゃんは早速シャーペンを手に取り、書き始めた。

私達も便乗して書き始める。

「かぶつても良いからね。でも、『誰が』はこの三人の中からね！書かれてることは必ずやる事がルールだから」

成る程。元々それが目的だったのか。

そうして書く事20分。

時刻は九時を回っていた。

「よっし！全部書けた！」

フェリちゃんが歓喜の声を上げる。

「こつから1枚1枚引いてくんだよー」

五つの束が机の中央に置かれる。

フェリちゃんの手が『何時』の紙の束に置かれ、中央近くの紙が的確に引かれる。

「『今日の夜』…うん、普通。というか今？今からやるのかな？」

「では、私が引きますね」

菊さんは『何処で』。引いたものを見ると、菊さんは苦笑した。

「『寮部屋で』…。私が書いたものです」

「じゃあ私は『誰が』か…」

私は『誰が』の紙の一番下から近い所を抜き取る。じつと紙を見る。

「『フェリシアーノ』が…」

「え？俺？」

フェリちゃんが目を丸くする。

「じゃあ怖いけど引こうかな…」

フェリちゃんがおそろおそろ紙を引き抜いた。

「『尊』に…尊ちゃんに？何？」

え？何？何？

何がくるのか楽しみのような怖いような。

「じゃあ、私は関係無い様ですので引きますね」

菊さんが安心してしまった様子で紙を引く。

その紙を全員で見ると、私と菊さんは狼狽え、フェリちゃんにこつと微笑んだ。

「『と、菊にハグ』…あはは、俺が書いたヤツだ。一番最初に当たるなんてね」

くそっ！ハグだとう！

この子はどれだけ私を萌えさせれば気が済むのかしら！

「えいつ。ぎゅー」

「ぐほめ」

そういう考えていると、ぎゅっ、と優しく身体が包まれた。
あれれー？あれれー？

「k t k r」

本田先輩貴方何してるの！

カメラを構えないでください！！

「菊にもぎゅー！」

はぐはぐ、と擬音が出そうな二人のハグ。

萌える！

即座に携帯を構え連続撮り。

よし。待ち受けにしとこう。

「じゃあ次引くよー」

そんなこんなで何度か引き、罰ゲームを実行していく。

半分くらいまで引き終わっても、まだ私達以外の人の名は出ていない。

時刻は十時を過ぎる。

月光の下で

「俺達、どんだけ俺達しか書いて無いの…!」

だんだん飽きてきたのか、言い出した本人が苦笑する。

すると菊さんが時計をチラ見して呟く様に言った。

「そろそろ夜遅いですね。私達は帰った方が良いでしょう」

「あ…そうだね。じゃあ帰ろうか」

2人が勉強道具をまとめて立ち上がり、玄関に向かおうとする。

「あ、送ってこうか?」

「ううん、尊ちゃん女の子だし、俺達2人なら大丈夫。ありがとう」

フェリちゃんがにこっと微笑む。

何この子!! きゃわいいわ!! おっと自重自重。

「じゃあ、また明日」

ドアがきい、と音を立てて閉まる。

「はあ…暇だ…」

シーンとする部屋。

2人が帰っただけで、面積がやたらと広くなった気がする。

少し、心細い。

私はベッドにはふっ、と顔を埋めた。

…うん、分かつてはいたんだけど。

欠伸って、そう我慢できる物じゃ無いってこと、よく分かってたんだけどね。

「…っ?!」

目を開けると、寮棟の廊下。

そして目の前は暗く、殆ど見えない。

…え? 誰? 何処? 何?

「…………?!」

少しパニックになる。声が出ないって何事?!

…あれ。もしかして、この髪の色って?

あれれ?何か口が柔らかいような?

誰?これは誰?私は誰?

ようやく目が正常に機能しだす。

予想通りではあったが、こつ当たるとは。

「…菊?」

この2人に、何があつたんだろう。

「えへ、驚いた?」

「…ええ、とても」

い、一応ね!!!菊さんのフリをというかうん、菊さんだと確かめる為にね!!!

「えと、さつき引いたでしょ?カード。その時、やんなかったから…尊ちゃんには、内緒だよ?」

「…ええ」

いやもう知ってるけどね。現在進行形で知ってるけどね。

そういう事が…。さつき、確かに引いた。

まあいつもやってる挨拶程度のキスなら見たけどね。

これは無しだよこれは…。

てつきり独伊かと思つてたのに。

はっ。というか早く戻らなきゃではないか。

「ほら、菊の部屋着いたよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

とか考えてるうちに菊さんの部屋着いてしまった。

「では、私はこれで…」

「…ねえ、菊?」

一時的に部屋に入ろうとした瞬間、フェリちゃんに呼び止められた。

「…はい?なんでしょう」

「あのさ」

もしかして。

さっきさっさと欠伸しちゃえば良かったんじゃないか？

「…泊まってるっていい？」

どうしよう。

窓の外から、月光が私達を照らす。

続きが気になっ t (r y) (前書き)

タイトルは気にしないでください。

続きが気になつて(r y)

「え、つとですわね…」
言葉に詰まる。

ここは菊さんの部屋だから、勝手に上がらせるのも菊さんに悪い。

「…ええ…」

私は俯く。

すると、遠くから走る音が聞こえてきた。

そちらを見ると、

ああ、私だ。

私がかつちに駆けて来ていた。

髪を靡かせ、息を切らしながら。

「あー良かった！フェリちゃん、まだ帰る前だったんだね！」

「え？あ、ああ、うん。尊ちゃん、どうしたの？」

凄い…流石菊さん。完璧に私である。

「うん！フェリちゃんが忘れ物してってね…ほら、絵筆！」

「え…俺、絵筆落としちゃったんだ…。ありがとう！これ、大切な物だから…」

よし、とタイミングを見計らい私の目を見ると、目配せをしてきた。

(早く欠伸してください！こつちに集中させてるんですから…)

はい、すいません。

ふあ、と欠伸をすると、フェリちゃんの嬉しそうな顔が前にあった。

よかった、戻った…。

えと、私帰って良いのかな？

「尊さん。もう夜遅いですし、梅雨とは言えど寒いんです。お帰りになつては如何ですか？」

「え、あ、はい」

菊さんに絆される。ナイスフォロー！。

私は少しの不安と少しの希望を持ちながら、不安な足取りで歩く。帰って良かったのかな。私。

「…で、どうなの？」

「…はい？」

「だから、泊まっても良いのかなって話」

「…ああ、その事ですか。もちろんよろしいですよ」

「…菊、自分の置かれてる状況分かってないでしょ？」

「はは、何の事ですかねえ」

「…まあ良いや。おじゃまします」

続きが気になっ t (r y) (後書き)

あー、尊になりたい。

早まり（前書き）

ミクのArtemis聴きながら書いてたらいつの間にかおかしな話に。

頑張れSクラス！そして私！

ええええええええええそんな!!

テストは本当は来週だったはずだ。それが何故…?!

「なんでっ?!」

「え…?そんなの、俺に聴かれても分かんないよお…。ただ、このクラスだけっていうのは分かっているけど」

「なんで?!」

「だから知らないってば!何故かこのクラスだけ、一週間も早まっちゃったんだよ。陰謀としか思えないよね…」

What?!校長は何を考えてるのやら!

「皆が静かなのはそれ、かあ…」

「うん、だから今日は皆テスト勉強で忙しいんだよ。個人で勉強しろって先生が言った」

ああ、涼宮先生らしい勉強方法である。

私は席に付くと同時に溜め息を吐いて、勉強道具を広げた。さてと。

勉強する気にはさらさらならないけど頑張るか。

テスト一日前の憂鬱（前書き）

今回無駄に長いので英仏苦手な人用注意。

テスト一日前の憂鬱

「テストめんどーい」

気がつけば寮の部屋。何とかちゃんと勉強とか食事とかして帰ってきたらしい。

ちなみに今は、今日は無い七時間目の時間。あと二十分程ある。

「あーあ、もう寝よっかなあ」

ベッドに飛び乗ると、もふもふとした柔らかさと睡魔が重なった。

「ふわあ……」

ああ、眠い。

尊

ばちつと目が開いた。

さて誰だ。

いつの間にか入れ替わり、ちょっと楽しくなってきた。

でも目を開けても、私の部屋な事に変わりはない。

「……………ん？」

ああ、そっか。

何も入れ替わりは心だけで起こるんじゃないんだった。

「……………誰かな、これ」

うーん。外から聞く声と自分が喋る声って違っつて言っつからよく分からないな。

私は手っ取り早く鏡を見る事にした。

「よいしょつと」

まあ大体想像はつくんだけれども。

*?**

「…は？」

何か一瞬目の前真っ暗だったような…、まあ良いか。そんな事を考えながら、俺は手元に視線を落とす。

「…?!お、お前なんでこんなところに居るんだよ?!」

「…はえ？」

隣に居たアーサーがずささと後ずさる。

へ？何が？何が?!俺が何かした?!

「何がって…あ」

自分の口から出る声。…高い。

「ああ…」

胸ポケットから生徒手帳を取り出すと、やはりそこには「浅野尊」の文字。

「俺はそのままだよ」

「ああ…、なるほど、入れ替わったのか」

この少しの間で、良くこんな早く順応できるものだな、と皆に対して熟思う。

入れ替わった、と言えば入れ替わってなくても入れ替わったと信じられるだろう。

尊

「…やっぱり、ね」

思った通り、鏡にはフランスシスの姿が映されていた。

「本当を言うとフランスシスが今何してるか知りたいけどそれは後回しって事で」

フランスシス

「はあ…」

尊ちゃん、いつになったら欠伸してくれるんだろう。

もう入れ替わってからとつくに三十分は経ってる。
尊ちゃんどうしたんだ…。

スカートって見る分には良いんだけど、着る分には結構気使うんだよね。

捲れてないかとか、短すぎやしないかとか。

だから早く欠伸して欲しいんだけど…、

「…っ」

あ、ヤバ。

お腹痛い…、どうしたのコレ。病気?!

「…ったあ…」

「?!お、おいどうした?!」

「お腹痛い…」

「待ってる、今保健室にー…」

そう言いかけて、アーサーの手が止まる。

あ、そっか…今尊ちゃんの身体だっけ…。

むやみに運んだら尊ちゃんに悪いし、まあその前に男だったら女の子運ぶなんて躊躇してできないだろうけどね。

「…ってえ〜」

何コレ。胃では無いよね…、脇腹…?

「…ったくよお、世話がやける」

そう言くと、俺の身体がふっと持ち上げられた。

あ、一瞬アーサー格好良く見えちゃったわ。ごめんアーサー。

そう思っている間、軽々しい足取りアーサーの足が進んで行く。

尊

さ、てと。フランス探さなきゃ。

そう思い廊下を歩いていると、アーサーの後ろ姿が見えた。

「あ、アーサー!」

「ん?」

あ、誰か抱えて…って私じゃん!!どうしたの私!

「あ、フラン…じゃなくて、尊。何かいきなりコイツが腹痛えって騒ぎだしてな」

「え、ああ…もしかして今日って」
よく分かりました。

「お前もついてくるか?」

「あ、うん!行くー」

アーサーの腕の中で、小さく「お腹痛い」とフランシスが呟いた。

テスト一日前の憂鬱（後書き）

私も15日にテストあるんだっ
た。
どうしよう。

就寝中の事故

「失礼しまーすっ」

アーサーがフランススを抱えていてドアが開けられないので、私が代わりに開く。

「はい？何ですか？」

柔らかな体躯と可愛らしい笑顔から、この人もどつかのアニメとかの人かなー、とか思っていると、ずかずかとアーサーが入り込んで来た。

「腹痛で」

簡潔に言うのと、保健の先生が驚いた顔をし、少し経ってからこつと微笑んだ。

「ここまで連れて来てくれてありがとうございます。後は私に任せとおいってください」

教師なのでそれなりに力はあるようで、ゆっくりとベッドに寝かせる。

私の容姿をしたフランススは一度呻くと、大人しくベッドにおさまった。

まあもともと変態だからな。ベッドにはあまり抵抗が無いんだろう。見ていると、フランススはすぐに眠りに落ちたようだった。

今はもう十時をとっくに回っているし、この二人のことだから、一緒にテスト勉強でもしていたのだろう。

そう考えると、私も眠くなってきた。

「ん…」

そういえば、『私』が寝てる時に入れ替わったらどうなるんだろう。ただ眠るだけかな。

私はそう考えながら、欠伸を一つ。

陽光が私を照らす。

はえ。

目を開ける。

そこは明らかに保健室では無かったし、ましてやあっちの学校では無いことは明らかだった。

…ここって…。

一気に不安と恐怖が頭を支配する。

どうしてここにいいのか。どうして今、ここなのか。

ここに見覚えはある。見覚えどころか、ここは…私とかなめが居た、中学校なのだから。

何故今この学校に戻って来てしまったのか。

誰と入れ替わりが起こった訳でもなく、この身体は私のものなのだ。もしかしてこれは…、

私が見ている夢の中の…私？

そうして私はあの悲劇を、あの惨劇を、再び繰り返し見る羽目になる。

就寝中の事故（後書き）

尊自己嫌悪。ドンマイ！

テスト近いけど頑張るぞ！

ってことでこれからもよろしくお願いします。

保健室での会話（前書き）

ある意味暗いです。

尊の昔を語る事ができませんでした！すいません！

時間があつたら今日中に尊の過去話うpしたいと思います。

保健室での会話

先生は他の教師に呼び出され、今は俺とフランスだけがこの保健室に居る事になっている。

ちなみに尊のした欠伸はきちんと入れ替わっているようで、俺の隣に居るのは正真正銘フランスだ。

そのままぼけつと過ごす。尊になんら別状がある訳でもない。

「…ねえ、尊ちゃんさ」

「…ん？」

フランススが呟くように言った。俺はそっちに顔を向ける。

「昔に…何かあったのかな」

「…は？いきなり何だよ」

「だって…なんか、俺達に対して恭しいって言うか…、なんだろう、友達以上の距離を持ちたく無いと言うか…、それより、友達という距離すら保ちたく無いって言うか…取り敢えず、何か変なんだよ」

「それは…俺達に会ったばかりかだからじゃないか？俺達はもともと一緒に居たから慣れてたけど…」

そう言うと、フランススは首を横に振った。

「そうじゃない。そうじゃないんだ。俺達に会ったばかりでも…、もう2、3週間は経ってる訳だろ？そうなれば、もう慣れてきても良い頃じゃないか？」

「それは…、そうだけど」

「なのに」

フランススは悲しそうな顔で尊を見つめた。

尊は瞳を閉じて眠っている。

「打ち明けようとしな。何かあったのか」

人には話したくない事もある、と分かりながらも言った様な発言。

「…俺達はさ」

俺はその言葉に対して呟く様に言葉を紡いだ。

「…？」

「…尊にとって、何なんだろうな。俺達は尊を友達だと思ってるし、仲間だと思ってる。でも、向こうは違うかもしれない。昔に何かあって恐れを抱いてるのかもしれないし、そうじゃないかもしれない。つまりさ…、俺達は、部外者なんだよ」

「…そんなの…、そんなの」
フランススは俯く。

時計の秒針の音がやけに大きく聞こえる。

「…悲しすぎるじゃねえか…」

「…尊？」

気付いたら五分程経っていて、俺達が尊の容態に気付くには十分な時間だった。

「…?!どうしたの?!」

「…分かんねえ。尊が…」

尊は明らかに変化を見せた。

頬が紅く染まり、冷や汗をかいている。

手が痙攣するように少し動く。

「どうしたの？苦しいの?!」

フランススがその手を取って尊に向かって話す。

「…、」

尊が何か呟く。

寝言だろうか。

何の夢を見ているのだろう。

それが決して楽しい夢では無い事は…、

「…1人は、

嫌だ…」

ぎゅう、とフランスの手を握り返す、か弱い手が語っていた。

保健室での会話（後書き）

暗っ。特に仏英の会話。暗いよ！

嫌だ。

頭に浮かんだ一言。

とても居心地が悪い。

ただ中学校に居るだけなのだ。

周りに人気は無く、教室の自分の机の前で、自分の席に座っている。高校と同じ席。

真っ赤な太陽から溢れ出る陽光が私の身体を染め上げ、机や周りの背景も全て紅く染まる。

見たく無かった光景が、目の前に、まるで蛍が光り自分をアピールするかのようになり、そこにわき出す。

そこにあっただのは、色々な罵詈雑言が書かれた私の机。

「……」

二度と見たく無かった。嫌と言う程こんな物を見て来たのだから。しかも、今高校生活という温かい道を辿ってしまった私に、この光景は重く冷たい。

夢だと分かっていたいながらも、私はそこに“存在”して居る。この辛さを掻き消す事はできない。

「……なんで……」

「……私ばかりがこんな目にあうの？」

私は続く言葉を紡ぎだせず、口を噤んだ。頬に涙が流れる。

いつの間にか教室は騒がしくなっていていき、太陽からの光が消え失せ雨の音が響く。

無論、机はそのまま。

「……」

「…尊！」

誰かが私の名前を呼んだ。かなめだ。中学の時のかなめ。髪は今より短くて、少し幼く感じる。そう。

このときのかなめは、自分が酷い目にあっているながらも私を庇ってくれた。

オタクだと言う理由から虐めを受けていた私。

そして、身体の所々に痣のある……。

彼氏からDVを受けていたかなめ。

それから、私とかなめは奇妙な絆で繋がっていた。

昔から幼なじみだった為か、どちらともなく相手にこんな事が起こると思っていなかった。

そして自分にこんな事が起こるのも予想外だった。

だから、私達は「学校」が怖かった。

学校に行けば苛めに遭う。

学校に行けば彼氏に遭う。

どちらもけしていい事とは言えなかった。

だから私達は家で二人で籠るようになり、それが更にクラスメイトや彼を触発した。

それでも私達は常に一緒に行動した。

何があっても。相手の身に何かが起これば、自分の身を挺して行く程の仲。

幸せだった。

思えば、虐められていても、私はかなめとずっと一緒に居られるのが幸せだった。

だからこそ。

今、人が怖い。

そして、何よりも愛しい。

さつきまで溢れていた人が徐々に消えていく。
居なくなっていく。

消えていき、教室には私独り。

孤独な、静寂で満ちた部屋に独り。
誰も居ない。

「………一人は、嫌だ………」

ふいに心の声と唇の動きが重なり、言葉を紡ぐ。

「一人は、嫌だ」

心の中から自分の素直な感情が、言葉となって口から発されていく。

「一人は怖い。寂しい。辛い。…独りになんて、なりたくない……」
ふいに目頭が熱くなった。

瞳から涙が零れ落ちる。

「一人は…嫌なんだよ。」

一人が好きなのなんて…この世に居やしない」

例え、報われずとも、

一人にだけは、なりたくない。

「尊!」

強く呼ばれ、はっと目を覚ます。

「え…、?あえ?」

うお、全身汗びっしょりだ。気持ち悪。

「大丈夫?随分うなされてたみたいけど」

「え…?うなされてた?」

「うん。凄く苦しそうだった」

「ほんと?大した事じゃないし…気にしないで」

心配させまいとにこつと微笑む。

私は立ち上がると、背中を伸ばした。骨がこきつ、と良い音をならす。

「ずっと寝てたら肩凝っちゃった」

「あ…、」

「ん?」

フランススが何かを言いかける。

そっちを見て首を傾げると、「いや、何でもない」と言っつて口を噤む。

「…?まあ、もう遅いし、私なら大丈夫だから。寮に帰ろうよ」

「あ、ああ…、そうだな」

アーサーがフランススの肩に手を乗せる。

???…何かあったのかな?

私は疑問を隠しつつ、保健室のドアを開いた。

心配を掛けちゃいけない。隠し通すんだ。

「…どう思っつ?」

フランススが俺に問いかけてくる。

「…どうって」

「尊ちゃん。…笑ってたけど、造り笑顔だった」

尊を部屋に送り、二人で歩く、夜の寮道。

黒い雲が月光を包み込み、俺達を照らすのは道の片側に設置してあるランプと蛍光灯だけだ。

「…ああ」

「…やっぱり、何かあったんだろうな…」

「…でも、俺達が無理に詮索するのも駄目だろ。他人事だし、下手すれば要らない節介になる」

「そんな事…、とづくに知ってる。でも…」

フランススが俯いて立ち止まる。

俺だって、尊を救ってやりたいけど。…でも。

「…っそ…、何でだよ…」

世界は、そう簡単に上手くはいかない事もとづくに知っていたし、それを覆すつもりはない。

しかし、今だけは…、今回だけは。

それを覆してみたい、と思った。

尊の為に泣くあいつを見て、無性にそう思った。

いや、俺は尊の為にその事を思ったんじゃないのかもしれない。

きつと、コイツの為だったのだろう。

俺は、今、確かに…尊に嫉妬してた。

何故 人間と言うものは…。

b e j e a l o u s (後書き)

なんか三話連続で暗い。シリアスは苦手なのです！
また次回からギャグを取り入れていければ…いいなあ…、

…無理かも。

昔。

まだ俺達も若くて…、今も十分若いけど…、そう、結構まだ小さい頃。

マシユーが怪我を沢山作ったアルフレッドの補助をして、うちに帰って来た。

「アルフレッド…?! どうしたの?」

アルフレッドの頬からは鮮血が流れ落ちていて、見てるだけで痛々しい。

「さつき、二人でしゃぼん玉作ってたの」

マシユーの話を聴くと、どうやらしゃぼん玉を追いかけて転んだらしい。

ありがちな話だ。

俺はしゃがんでアルフレッドの目線まで下がる。

「しゃぼん玉…、消えちゃった」

アルフレッドが嗚咽の混じる声で呟いた。

俺は、雷に打たれた様な感じがした。

「しゃぼん玉、ふわふわ…のぼって、消えちゃったの…」

無垢な子供は、当たり前の事を知らない。

しゃぼん玉が時間を経ると消えていく感覚を。

当たり前の物がすぐに消えていく感覚を。

当たり前の事が当たり前ではなくなる事を。

俺は泣きじゃくるアルフレッドを抱え込む。

「…ふらん?」

「…っ、ごめ…」

いつしか涙が零れ落ちる。

昔の事なんて思い出したく無かった。

思い出したって辛い事なのに。どうしてもふとした瞬間に思い出し

てしまう。

ああ、

あのこは今どこにいるの？

当たり前前の物が消えると知っていれば、悲しむ事なんて無い？

そんな訳は無い。

覚悟を決めておけば、苦しむ事など無い？

そんな事は無い。

当たり前前にあつた事が、今では違つと分かつていければ、辛い事など無い？

そんな事はあり得ない。

俺達は、そんな簡単に物事を理解できるほど利口じゃない。

換算してしまえば、ただのワガママな子供で、自分が一言言つたくらいで世界が変わつたりなどしないのだ。

そんなのは当たり前なんだ。

だから…、俺達は嫌でも利口にならなければいけないのだ。

いつまでもワガママを言つてる訳にはいかないのに。

いけない、のに…。

ぎゅう、とキツく抱きしめると、ふわり、と柔らかい髪の毛が顔に掛かった。

濡れた頬は冷たい。

…何か、香りがする。アルフレッドの髪の毛の香り。

何処かで嗅いだ事のある香り。

「……」

アーサーの、

「…ふらん？」

香り。

「…だいじょうぶ」

頭に小さい感触が乗り、ふわふわと撫でられる。

大丈夫。

そう、確かに言った。

「…ありがとう」

呟くと、アルフレッドがにこっと笑った。

その微笑みがどうしようも無く俺の心に染み込んで来た。

一瞬、アルフレッドとアーサーが重なった。

そして、俺達の人生は大きく激変した。

過去の記憶 ver・Arthur Kirkland

「俺…、いつまでも君の弟じゃないんだよ」

豪雨の中。

その声だけは、何故かはつきりと聞き取れた。
身体を雨が冷やす。

しかし今は、その声が一番冷たく心に突き刺さった。

「今…なんて」

本当はもう一度聴きたくなんて無かった。でも、本当は間違いなんじゃないかと、自分に都合の良い疑いを取り付けただけだった。

「だから…、俺、君の…」

声は風と雨に遮られ、姿すらも霞んで見えた。
嘘だ。

昔から、一緒に居ただろう？

「……………じゃあ。俺、帰るから…、家に」

「……………え…？」

そんな事は無い。

何かの間違いだと思いたい。

しかし俺に向けた背は、明らかに付いては行けない雰囲気を感じて
いた。

「はい。今出ますよーっと」

チャイムを鳴らすと、中から機械的な音が聞こえ、ドアがかちやりと開いた。

「どちらさー…、ってアーサー?!どうしたの?!びしょ濡れじゃ
ん…!」

「…フラン…、俺…」

「…へ？」

フランスの姿を見た途端目頭が熱くなったが、泣きそうになったのは必死でこらえた。

「取り敢えず…、中入ってよ。それから話しょ？ね？」

「…うん…」

こうして、俺達は互いの心に傷を持ったまま…。

それから、数年が過ぎる事になる。

「…フラン？どうした？」

「…へ？」

「ぼーっとしてたじゃねえか。何かあったのか？」

疑う様な視線を投げかけられ、思わず動揺してしまう。

「そ、そんな事無いよ！アーティーだって、ぼーっとしてたじゃん」

今、過去の事を完全に忘れたとは言えない俺達は。

世間一般に言う、普通の生活をしていた。

渾名で呼び合える環境。信頼し合える友情。

それだけで、十分だった。

「…、ただ、1人を除いては。」

過去の記憶 ver・Arthur Kirkland (後書き)

1人って誰だろうね。

過去の記憶 ver・Kaname Tendo (前書き)

今回ちょっと不思議な話。

過去の記憶 ver・Kaname Tendo

立ち入り禁止。

そう書いてあったそこはまさしく自分の終わりと行ってよかった。

立ち入り禁止の表示を乗り越え、私はそこに立った。

無人駅。

誰も私は何をしようと気にしない。

何も無いし、誰も居ないし、ましてや声が聞こえる訳も無い。

電車はこの駅を何事も無いように進んでいく。

まだ 来ない。

私は心の底から電車が来るのを望んでいた。

いや、

正確には望んではいなかった。

死ぬのが怖い。

この世を見れなくなるのが怖い。

あの人は今何をしているのだろうか？

あの子は元気であるのだろうか？

今、この瞬間、何処かで命が誕生しているのだろうか？

知らず知らずのうちに、周りから手が伸びた。

「行かないで」「行ってはだめ」「まだ」「とにかく」「あなたが居なくなるのは」

「嫌」

私を助けようともがく。

手が、私を助けようと動き回る。
温かく、
心に響く。

私がここから居なくなっても誰も何も言わない。
そう思っていた。

「ここにいて」

一言言われただけで、こんなに泣く事も無いと思っていた。
嫌だと。ここにいてほしいと。

思ってくれる人が居た。

誰かは分からない。

友達。

クラスメイト。

学校の人。

親戚。

他人。

…、あなた…。

二度と戻りたく無い。

ここに居ては私は幸せにはなれない。

腕を振りほどこき、私は轟音を上げながら迫ってくる電車の前に立っ
た。

轢きたいなら轢けば良い。

私は覚悟を決めているんだ。

「さあ…私を、殺してよ」

電車は勢いを増す。

後悔なんて、とうの昔に忘れた。

…何で…？

そう言いたくなる、「腕」の行動。

腕が、私を間一髪の所で助けた。助けてしまった。

「…なんで、私を助けたの…？」

腕の正体を突き止めないまま、聴く。

「ねえ…なんでよ…、答えてよ…！私は…私はっ…」

すると、腕は私を線路から引っぱり上げ、抱きしめた。

「行かないで」

「…え？」

聞き覚えのある、優しい声色。

「…おにい、ちゃん？」

過去の記憶 ver・Kaname Tendo (後書き)

こつという意味の分かんない展開意外に好きですフヒヒWWW
お兄ちゃんどうしたw

かなめWWW

切り落としたかなめここで出しゃばるか…くそっ!!

「腕」とか「お兄ちゃん」とか知らない単語いっぱい。

でもそういう展開大好きな私にはどうする事もできない!!
最後まで変な話読んでくれてサンクスでした!

あ、でもまだ続きますよ?ニヤリ

過去の記憶 ver. Kotoba Tendo (前書き)

いどばって名前良いよね。

過去の記憶 ver・Kotoba Tendo

天道ことば。

それが、僕の名前だった。

僕には妹が居た。

親は放任主義だったから、毎日早く出て行って毎日遅く帰って来た。た。

帰ってこない事もちよくちよくあったと思う。

だから僕は、そのぶんかなめを可愛がってやった。

僕の、たった1人の妹。

その妹を守ってやろうと、僕は1人で、無意識に決意した。

かなめが顔に傷を作って帰って来たのは、中学2年の頃。

僕はかなめを問いつめはしなかった。…その思い詰めた顔に、さらにプレッシャーを掛ける様な事はできなかったから。

僕が守ろうと決意したことは、間違いだったのだろうか？

それから二ヶ月程。

かなめの傷が悪化した。

身体の至る所に痣がある。

手には幾つもの絆創膏が貼られていて、見るだけで痛々しい。頭が真っ白になった。

かなめは小さく震えながら、僕が何も言っていないのに語りだした。自分の事と、その彼の事を。

僕は自己嫌悪に襲われた。

かなめを救えなかった。

それだけの理由かと思われるかもしれない。

しかし、親が居なかった僕には何よりも妹が大事だったのだ。
だから僕は……。

電車の轟音が、間近に聞こえた。

かなめがここに来て・いる事は想定外だった。

かなめが僕の亡命場所の無人駅に降り立った時、迷わず腕を引いた。

かなめはまだあっちに行っ・てはいけない。

僕はもうこの世には居ないけれど。

……でも。

かなめがあつちに行くのは……、かなめの為としても駄目だから。

かなめは小さい声で僕を呼んだ。

僕のたった1人の妹。

命を落とさずにすんだ妹は、これからどんな人生を歩んで行くんだ
ろう？

普通に仕事をして、家庭を築いて……。

幸せな人になっ・てほしい。

その為にも……。

僕は、かなめを助けに来た。

過去の記憶 ver・Kotoba Tendo (後書き)

お兄ちゃんとかなめの話。

かなめは辛い事が沢山あったけど傍で支えてる人も居たよってのを描きたかっただけです。

というかなめはいつまで経っても捨て駒なのはwww

次回から尊の話…にいけるのかな！。

私の次回予告いつも役に立たないからwww

氷上と私（前書き）

四十話なのに暗い。

氷上と私

ことばさんと、かなめ。

アーサーと、フランシス。

皆に相棒がいるように、私にも一応相棒が、いた。

中学生の頃。

私とかなめは自分の事で手一杯で、話はしていたけどそう長くは話していらなかった。

私とかなめと一緒に居れば、かなめの彼は私を狙ってくるだろうし、クラスメイトはかなめを狙ってくると思ったからだ。

私達は一緒に居たかった。

でも居れなかった。

その時、隠れて私に会いにきたのは、クラスメイトの女子。

それが、木村氷上きむらひょうじょうだった。

あまり話した事は無かった。しかし大人しい子で、クラスでも独りで居た様な気がする。

歴史の時間、グループで人物を調べる時、私は独りだった。

誰も話しかけてくれない。

もう慣れてきてしまっていたし、それで良いと思っていた。

慣れたくなつてなかった。

私が独り机で準備を整えていると、ふと目の前に暗い影が立った。

「っ……?!」

いつも虐められていた私は、いきなり前に立たれた驚きで後ろに尻餅を着いた。

「あ、だ、大丈夫?」

影の主は意外にも私に手を差し出した。

「……?」

鋭い目で相手を見上げると、相手は困った顔をして首を傾げた。

…変な人だ、と思った。

…私と居れば、虐められるかもしれないのに、手を差し伸べてくれた。

なんで？

どうして？

頭の中で疑問が反復する。

疑問を抱えながら手を取ると、ふわりと温かかった。

友達の居なかった私にとって、氷上は救世主だった。

どうやら氷上はこのクラスの中心的人物のようで、私への虐めを発見してそれを止めるように説得したのだと言う。

確かにそれ以降苛めは無くなった。

私の問題は解決した。

しかし、苦悩はここからだったんだ。

かなめを救う事が、私と氷上にどんな影響をもたらすのかも知らないまま。

氷上と私（後書き）

かなめ、っっていう名前とことば、っっていう名前は「応漢字あります。
後々出てくると思いますよ！！多分！！

四十話暗いwww大丈夫かなあwww

l a s t t h e p a s t (前書き)

タイトルは「最後の過去」

l a s t t h e p a s t

「…うそ…」

私は氷上の話を聴き、絶句した。

氷上に双子の兄が居る事は知っていた。

しかし…、

その兄の名前と、かなめの彼の名前が一致するとは、思っても居なかつた。

きむらいちか
木村 壱加。

それが名前？と思う様な、珍しい名前の兄妹。

それが木村兄妹だった。

親も不思議な名前の家系で、いままでずっと不思議な名前を貰ってきたらしい。

もつとも、今気にすべきはそこではない。

「本当に、氷上の兄、壱加がかなめの彼なのか」
それを突き止めるだけ。

しかし、そんなの調べなくても分かる。

壱加、なんて名前普通にはないし、あったとしても女だろう。

かなめは中学一年生の頃、凄く幸せそうだった。

周りから見ても、幸せそうだなあ、とほわほわを分かち合える感じ。

…しかし、それはいきなり始まった。

かなめはある日、突然私の部屋に乗り込んできた。

何かある、そう感じたのは一瞬遅れてからだった。

滅多に泣かないかなめが、壱加から貰ったクマの人形を抱きしめて。

打ち明ける。

「……」

少しの間、何が起こったか分からなかった。

私が今何をしなきゃいけないのか…かなめに対して、何をしてあげれば良いのかすら分からない。

とりあえず、私は何をすれば良いんだろう？

かなめは止めどなく溢れる涙を拭くと、へへ、と笑った。

「ありがと。聴いてくれるだけでなんか…軽くなった気がする」

本当に、それだけで良かったのだろうか？

私はその後、かなめの部屋に一度だけ行った。

無惨だった。

机の上は荒らされて、クローゼットや筆筒からは服が溢れていた。

「汚い部屋でごめんね」

かなめはそう言うと、顔に笑顔を貼り付けた。

「自分でやったの。吉加は部屋に入れてないの」

そう呟くと、かなめはベッドに腰掛けた。

きつとかなめの中のストレスが爆発してやったのだろう。

片付ける気力も無いんだ。そして…その辛さを、私は知っている。

この頃、丁度私への虐めが始まっていた。

だから…、中学時代、かなめの部屋に行くのも、これで最後だったかもしれない。

かなめは自分の手に顔を埋めた。

「もう…どうして良いか、分からないの」

静かに泣くかなめの横には、あのクマのぬいぐるみが…。

首にリボンを縛り付けられ、無惨にその身体から綿をはみ出させていた。

その光景は、余計に私の心を縛り付けた。

本当は、かなめは私が思うよりもっと辛かったんだ。

いつからなんだろう。

吉加から向けられる笑顔が、かなめにとって怖いものになった時は、無力な私達には、その時が分からない。

かなめに辛い思いをさせたくない。

でも、結局は私たちは何もしてあげられない。

私と氷上、かなめの間に深い亀裂が入ったのはきつとその時だったのだろう。

絆に傷が入った、とかそういう生易しいものじゃない。

心の奥底、誰も知らない様な場所で…。

その傷は、生まれ、広がっていく。

まるで、私達の生活を蝕むかのように。

「…、尊ちゃん？」

「…はえ？」

誰かに名前を呼ばれ、はっと顔を上げると、フェリちゃんがこちらを見つめていた。

「大丈夫？」

「あ、うん…」

テストで疲れた事もあつたし、うたた寝していた。

「眠かったら、もう寝ちゃおうよ。明日もテストなんだし、ちゃんと体力蓄えておかなきゃ」

「うん…、ありがとう」

「…何かあつたの？元氣無さそうだけど」
不思議と背中が張りつめる。

…こういう人なんだ。フェリちゃんは。

いつもはヘタレでおどけてるけど、仲間の変化は見逃さない。こういう人だつて、分かっていた。

分かっていたけど、不意をつかれて、涙が溢れそうになる。でもそれは死ぬ気でふんばった。

「ううん、なんでもない」

l a s t t h e p a s t (後書き)

とりま過去編終わりにしましょかね！

なんかこのままダラダラ書き続けてると終わり無くなる気がするんで。

過去断ち切り！！終わり！！

また関わってくると思いますけどね。めんどくさ。

まあ気楽に見てくれたら嬉しいです。

次回からギャグ取り入れてー、ヘタキャラ出してー、と。

忙しいっすねw

そして、現代。(前書き)

ちよつとは明るくなつたかな。

ギャグ取り入れたので、かるうい心で見てください。

そして、現代。

テスト明けの翌日は休みだった。
まだ少し疲れが残っているが、少なくとも今日だけはゆっくりできる。

何をしようかと考えながらクローゼットを漁る。

すると、携帯が震えた。

「あれ…?」

誰だろ、と思つて携帯を取り出し、画面を確認する。

【from・アーサー】

「なんでつっ?!」

つつきりフェリちゃんとかかと…!

そんな事を考えながら、携帯を開く。

「もしもし?」

『ああ、尊か?腹痛はもう大丈夫か?』

「あ、うん、おかげさまで!」

あの日からアーサー達とはまともに話してないし、心配されるのは当たり前だ。

「で、どうしたの?アーサーが電話なんて珍しい」

『ああ、尊、今日皆で遊びに行かないか?』

「…へ?」

うあ!つい間抜けな声が出てしまった!

なんか、アーサーはつつきり真面目な人だと思つてたから…!
いや、勿論ツンデレだけれども!

『休みの日は外出して良いっていう規則なんだよ。テスト明けたし、折角だから…つて、アルが言ったんだ』

ほえー、と溜め息を吐く。

『で、どうする？行けるか？疲れてんなら、行かなくても…』
「行く！」

アーサーの言葉を遮るように返事を返す。
こんな楽しすぎる休日の遊びに私が行かない訳が無い！

『そうか？じゃあ、朝十時に校門集合だから。じゃ』

「うん！ありがと！」

アーサーとの電話を切り、携帯を鞆に滑り込ませる。
ついでにカメラを忍ばせて、っと…。

「よし、何着てこうかな？」

私はるんると服を漁りだした。私の服には意外に可愛いものが多い。
まあ、似合わないのが多いんだけども…。

「…」

は。辛気くさくなっちゃいけない！笑顔笑顔…。

こうなったら自前の妄想力で笑顔を取り繕う！

「…にへ」

駄目じゃないか私！

と、1人芝居をやめ、私は本格的に服を探し出した。

折角の美男子達とのデート（？）だもの！！違うけどデートなんだ
もん！！

気合い入れていかなきゃ！

「あ！これなんてどーかなあ？」

こっちに来る前に、趣味で買ったユニオンジャック柄のロングTシ
ヤツ。

もちろんイギリス…アーサーが好きだったってのもあるけど、単に
可愛いから買っただけ。

「まあ、ありきたりだけどショーパンとサンダルでも…」

頭の中で完成図が出来上がる。これで良いだろう。

ちゃっちやと着替え、鏡を見ると、やっぱり何か物足りない。

「うーん…あ」

私はある事を思い出すと、制服のスカートのポケットをまさぐった。

「あつたあつた」

でてきたのは、小さな丸い石が付いたネックレス。

この前テスト明けに、フェリちゃんがくれたものだ。

「これ付けてこつと…」

それを付けてもう一度鏡を見ると、意外に様になっている。

私はえへ、と笑うと、時計を確認して、玄関に向かった。

「尊ー！こつちだぞー！」

アーサー曰く発案者らしいアルフレッドがこつちに手を振って笑っている。

時計を見ると、時計は十時五分前を指していた。

「ごめん！待たせたかな？」

「いえ、大丈夫です。まだ来てない方もおられますし」

そう言くと、菊さんはおもむろに携帯電話を取り出した。

…それにしても。

(レベル高いなちくしょおおおおおおおおお)

元々知ってたけどね！この二人がかっこいいのは知ってたけどね！しかし、制服と私服、となると話は別だ。

アルのラフなパーカーとジーンズが異様なマッチを見せてるし、菊さんは菊さんで羽織ったジャケットが大人びた印象を醸し出している。

(ら、楽園やんなああああああああああああああ)

ああもう超可愛い！この頃入れ替わりとかばっかではぼPCとかしてなかったからずっと禁欲生活(?)だったからこそ可愛い！超抱きつきたい！

『…尊さん？』

「…はえ？」

あ、あれ？二人が凄いじとつとした目で私を見てるんですけど？

「ああいえ、なんでもありませんよ。ただ、ずっと黙っていたのでどうしたものかと」

「そうそう。しかも俺達の方向いてぶつぶつ呟いてたから…ちょっと驚いただけなんだぞ」

そうには見えないが、と思ったが言うのはやめておいた。

これ以上話すと、逆に墓穴を掘りそうな気が沸々とするから。

「ヴェー、尊ちゃん！もう来てたんだー！早いねー！」

その後も続々と人が集まり、私達はいつものメンバーで行く事になった。

しかし今回は、最後の1人が来るのを待っている状態である。

「1人…？んー？」

「あはは、もうすぐ来ると思うよ。ま、気長に待つてよー！」

フェリちゃんが私にペットボトルの飲み物を手渡す。

さすがナンパ大魔王だ。さりげなく優しい。

ありがとう、とお礼を言って、一口飲む。

それは甘くて酸っぱくて、まるで過去から現在までの私の人生を物語っている様な味が…。

「って何だコレ?! うっわ何この味!」

「へ? 何かさつき、面白そうだったから買ってきたの」

面白そう、ってだけで買うな! 買うなら自分で飲め!

私は恐る恐る味を確認すると、「マンゴスチン味」と書いてあった。

「これ嘘だろう!」

「というか、マンゴスチンって何? って思って買ってきたんだけど」

「果物の王様って呼ばれる、美味しい果物だよ。食べた事あるけど、ただ甘くて美味しかったんだが…この飲み物は嘘もんだろう! 作った人、食べた事無いだろ!」

マンゴスチン味、なんで作ったんだ…、とか思いながら、私はキャ

ツプを閉めた。

と、同時に、指から力が抜けた。

仲間達全員が微笑んで私を見つめている。

温かい笑顔の全てが私に向けられている。

その笑顔がどんな意味を持っているのか、昔の私なら分からなかっただろう。

昔の私は毎日のように蔑みの笑顔に向けられ、温かい笑みに会った事が無かったから。

でも、今は違う。

私の大切な仲間達と私が笑って暮らせている。

皆の微笑みに包まれながら…。

私は、ぎこちないけれど心からの笑みを返した。

これから、喧嘩することも必ずある。

考えに違いが生まれる事もあるだろう。

しかし、私達はこれから先、どんなことがあっても…。

“ It will laugh . ”

そして、現代。（後書き）

1編終わり！

ちなみに1編は4月でした。

あ。でもこのデート（？）編も書きたいかも。

よし、なんとかして書くぞ…！WWW

という訳でまだまだ続きます。これからも学へ夕をよろしくです！

01 (前書き)

上編。

中下はちまちま書いていきます。

「あ、そういえば、あと1人って誰なの？」

アーサーに問いかける。今のところいつものメンバーは集まってる訳だし、他の人かな…？

「うーん…来てからの楽しみみって事で」

アーサーは悪戯っぽく笑った。

ご馳走様です、と呟いてから、私は学校に向き直る。

すると、ちょうどそのお方が駆け寄ってきていた。

「待たせたなこのやるー」

お方は呟くと、ツンと張った目付きでこっちを睨んだ。

くるん。

くるんくるん。

(お…お兄様だあああああああああああああああああああ)
よりによって！

「もー、兄ちゃん！遅れてきたんだから、まずは謝ってよ」

「うるせえ馬鹿弟。元々はお前が俺を起こさないからだ」

フェリちゃんが憤慨する。

「これが俺の兄ちゃんのロヴィーノ。ロヴィって呼んであげてね」

その時、私は菊さんの肩がふるふると震えているのを見た。

「…あの、菊さん？」

「…ああ…」

菊さんは真っ赤な顔を上げた。

「ブラコン萌え」

分からなくない。

すると、お兄様…ロヴィーノの後ろから、とある人物が駆け寄ってきた。

「ロヴィイイイイ頼むから1人で離れていかんといてや！親分心配で死んでまうで！いやほんとおおおおに！」

「うるせえハゲ！誰かと二人で戯れてる！」

「嫌やあそんな事言わんといて！俺ロヴィイじゃないと…ぐはあ」

なんか大事な事言いかけた途端に、ロヴィーノが肘鉄を繰り出した！

「こいつはアントーニヨ。トーニヨって呼ぶか、もしくは親分って呼んでやれ」

「ぐす…ロヴィ、一度も親分って呼んでくれた事あらへんに…」

「黙れ。それとこれとは関係ねえ」

確かに。

「で、その二人も一緒に行くということ…？」

アーサーが頷く。

「本当はロヴィーノだけの予定だったんだが、やっぱり付いてきたか…このペドが」

「ロヴィは幼児じゃねえ！ただのいたいけな天使だこの元ヤン…！ぐわあと血眼がアーサーに向けられる。」

あ、口調崩れてる！やっぱりアルマダの恨みか！

「いたいけな天使って…はあ」

なんだろう。凄くアーサーが大人に見える。

あれか。色々この世界バランス崩れてるから西マなのか。

口

なるほど、とか考えてる間に、いつの間にかトーニヨがロヴィの足にくっついてすりすりしている。

…もう、帰って良いかな、私…。

01 (後書き)

親分怖いよー！ある意味怖いよー！大丈夫なのかな…。
ちなみにこの話は上中下です。学ヘタの休み時間…小休止だと思っ
て頂ければ！

早く本編読みたい方(居ないよね…そんなの知ってるもんばかあ！)
も小休止で和んで頂ければ！小休止はこれからちよくちよく入って
きますが、ギャグ強めになります。

そういえばそろそろまたテストです。どうしよう。
きっかり二週間後だと思えます。どうしよう。

小説書くのって…楽しいね…！

小休止が終わったら2編(五月)に入って、テストの点数晒したり
する予定です！あくまで予定！私の役に立たない予定(をい！)！
にしても、誰かに文才を分けてほしい…；

まあ、テスト終わっても終わらなくても更新頑張ります。

あと今年の年賀状もう書き始めようかな…。

毎年手書きなんで面倒！wwwwでも絵描くのは好きだからがんばり
まする！

02 (前書き)

復活とまではいきませんが、書き上がったのでやっと上げます。

ストライク余裕、という言葉が一番合うだろうか。

アルが投げたボールはガコン、と小気味良い音を立て、ピンが倒れた。

…どんだけ凄い力で投げてるんだろう。ちょっと…？

「くたばれアーサー！」

…最早かけ声となったその言葉を発しながら、ボールが投げられる。するとボールは意思を持っていくかのように吸い込まれていき、ストライクを叩き込んだ。

「…その掛け声はやめてほしいんだが…」

アーサーが苦い顔をしている。ちよつと同情しそう。

「でも、この掛け声じゃないとやる気出ないんだぞ。その前に、これだとストライクがよく出るんだ」

そうだったの？！

「よく、って言うかお前来てからずっとストライクしか出してねえだろ…」

「うん、ずっと掛け声付けてるからね」

「…ああ、そうか…」

アーサーは立ち上がると、一番出口に近い席に歩いていき、腰を下ろした。

何か凄くネガティブオーラが見えるのは気のせいだろう。そう思っ
ておこう。

「どうしたらいい？」

「ああ、ほっとけば大丈夫だと思うぞ」

こつそリアルに聞くと、「いつものこと」「らしい。そうなのか？

アルは器用にボールを手の平で回すと、上に放り投げた。

ちよちよちよ、高いよ?!ちよつとー?!

投げられたボールはいとも簡単にアルの手中に収まった。ほっとし

た。

「でも、まだまだ本気で投げてはいないんだぞ」

「ええー…」

本気で投げてなくてあんな威力つて…。

「俺が本気で投げると弁償しなきゃいけないし」

「うん、取り敢えず状況が分かんないよ」

遠回しに凄いこと言われた気がする。

「コース外れると店員が泣くし」

「何したの！」

泣くんだ。

「最悪の場合、店潰れるし」

「そこまで行くの?! え、実はアルってプロピッチャーだったの？」

「！」

衝撃の事実だった！ボウリングと威力ある人って、相性悪いんだな

あ…。

ナイスピッチの前にブーイングが起こりそうだ。

「あとこの前初めてボウリング行って、ノーバウンドでストライク

叩き込んだら凄く怒られた」

「そりゃあね！」

きつと凄く破損したんだろうなあ…御愁傷様です。

「リンゴを片手で割ることもできるし」

「アルのクオリティ高すぎる！」

たしかリンゴって握力80くらいなきゃダメなような…？

「ボールだって、本気で掴んだら卵みたいに割れるし」

「純粹に凄い！」

球が卵のように！駄洒落ではない、けして違う！

どちらにしるある意味凄いつて…。

「取り敢えず、アルはボール投げるの止めよう」

「えー?! それじゃ来た意味ないんだぞ！」

「いや、もう十分だから。店が壊れる以前に、アーサーにダメージ

かかるから」

そう言つと、渋々と言つた感じで席に着いてくれた。やれやれ…。

「ばかばかばか…あるのばーか…」

なんか呟いてるけど一応それは無視しておこう。過剰に反応してもなあ。

こっちの方つてキャラソン存在するのかな。

「さて、次何処行くー?」

フェリちゃんパンフレットをがさがさと捲る。どっから持つてきたんだ、そのパンフ。

「そうですね…では、そろそろお昼時ですし、どこか食べに行きましようか」

菊さんが呟く。

くはあ。パンフを見るために2人で顔を寄せないでくれ!美男美男つていいなあ…

はっ。変な事を考えてる場合じゃないんだよ、私!

「俺、マツ がいいんだぞ!」

おおっ、予想通りの!

「俺、ウエン イーズで…」

うん、アーサー、ちよつと自重しようか。

「はーい、お兄さんフレッシュ ス!」

なんだ、このハンバーガーネタ。どんだけ続くんだ。

「ちよちよちよ、ちよつと待つて。一度に頼める訳ないでしょ」

「そうですね。尊さんの言つ通りです。きちんと1つに纏めて食べに行きましょう」

流石菊さんだ。順応が早い。

「取り敢えず、10人近くも居るんですから、一気にファストフード店に押し掛けても迷惑なだけですよ。小分けして店に入りましよう」

「そつだな…菊の言つ通りなんだぞ!じゃあ俺はマクに行くんだ

ぞ

「おい待てこら。お前だけじゃ心配だろ！俺も　ツクにすつからな
！」

「アーサーはアルについて行くようだ。仲良しで何より。」

「では、アーサーさんとアルフレッドさんはマ　ドナルド、と言う
事で。私とフェリ君とルートさんはモ　バーガー行きますので」

「2時になったら駅改札に集合ね！じゃあ」

「フェリちゃんとルートさん、菊さんの姿が遠ざかって行く。ああ…
清涼剤…。」

「んで、残ったのはロヴィ、トーニヨ、フランシス、私。の四人。」

「何、この微妙な組み合わせ」

「知らねーよ」

「トーニヨは相変わらずロヴィにくつついたままだ。」

「何となくイラツと来るが、これがリア充爆発の起源なのか。」

「俺はロヴィと一緒にならどこでも」

「アントーニヨ、去ねや」

「何でいきなり名前呼び？！そしてなんでラン口調なん？！」

「死ぬ。天国行け。ル　ス・キャ　ルに殺される」

「最後の意外にテンション下がるわあ、それ」

「ルイ・キ　ロルってイギリス人だっけ。」

すると、フランシスが私の肩に手を置いて、呟いた。

「あれでも精一杯のデレなんだよ…でも、今のデレの暗号が分かる
人は少ないと思う」

「暗号？」

「なんだそれは。全然気付かなかった。」

「そう。暗号…ロヴィも、素直じゃないよねえ」

「？そう？」

「そう」

「フランシスが何かにつっこにつっこ笑ってた。…なんだ。思っ
てはいけないが気味が悪いぞ。」

「何でも無いよ。じゃ行こっか」

「あ、うん。ロヴィ達はどうする？」

「ああ、俺達も一緒に行く。こいつと2人きりは心配だ」

確かに。

ずるずるとトニーヨを引き摺るロヴィを連れて、私達は歩き出した。

尊

思い出した。

今こそ私の能力を使うべきだろう！

他のグループの様子見る事も出来るし！

ナイスアイデア、私。アルじゃないけど。

では、早速。

???
???
???

暗い、暗い、世界の中で、ゆりかごに揺られているような…。

ふわふわ、揺れる。

昔にも味わった、こんな感覚…。

ふわり。

ふわり。

ああ、そうだ…。

夢の中だ。

昔、フランススが寝てる間に入れ替わって、夢の中に入り込んだ事があった。

その時だ。その時に味わったんだ、この感覚。

此処は何処？私是谁？

03 (前書き)

うーん

ちょっと独自の解釈あります。ネタバレになりますからここまではし
か言えませんがこの解釈苦手な人が多いんじゃない？

??? *

ふわり、とした感覚が止まり、私はゆっくりと目を開く。
そこは色々な花が咲き乱れて居て、土と花の香りが私の鼻腔をついた。

「…あれ？」

誰かの夢だ、って事はわかる。

でも、こんな場所は…今まで初めてだ。

花畑。

私は、絵に描いた様な花畑に居た。

起き上がると、身体の節々が痛み、思わず声を上げてしまう。

…誰の夢なんだろう？

私の頭の中ではその疑問が廻っていて、
しかし直ぐ様、疑問は解決した。

「…え？」

花畑の遠く、遠くに、黒い人影が見える。

ゆらり、ゆらりとこちらに歩いてくるそれは、私にとっては漫画の世界でしか見たことがなくて。

でも、このー…この夢を見ている人物にとっては、かなり思い出のある人物なのだと気づいた。

黒い大鷲を従えたその人は。

「ー…あ、」

フェリ

急に意識がはつきりしたように感じた。

確か居眠りしてたはずなんだけど、気づくとそこはどこかのファミリールレストラン。

「尊ちゃん？大丈夫？」

目の前にはフランス兄ちゃんの顔が。…ああ、なるほど。

即座に状況を理解してしまうほど慣れてきている自分が…今は少し、腹立たしかった。

何か、特別な夢を見ていた気がする。

久々に…夢の中でも滅多に出てきてくれない君に、会えるような気がした。

でも…夢の中の出来事なんて、すぐに忘れてしまうものだ。すごく幸福な夢を見ていたって、

不幸な夢を見ていたって、

例え自分の運命を左右するような夢を見ていたって、全て忘れてしまう。

でも…君が出てきてくれる夢は、本当に珍しいのに。なんでみんな…みんな、俺の夢を邪魔するんだろう？

俺は君に会いたいだけなのに。何で？

「ああ、兄ちゃん。俺、尊ちゃんじゃないよ」

「え？あ、……うん、理解した。で、お前は誰だ？」

「フェリ。フェリシアーノだよ」

フランス兄ちゃんが少し戸惑いながら応対してくれる。

兄ちゃんが目を丸くしてこっちを見てるけど、説明すれば信じてくれるだろう。

…でも、正直怖い。

君の夢を見てしまったら、君がそこで居なくなるような気がして。もう未練なんて残ってない、なんて言ったら嘘になる。

俺は…君が好きだったんだ。

でも君は俺の前から居なくなつた。

「へえ…まあ正直信じられへんけど、もしロヴィと尊ちゃんが入れ替わつた時に知つとかんと面倒やしなあ。まあ信じた方がええんやろな」

「おい、それどういふことだお前」

よかつた。

信じてくれて本当に良かつた。

俺の言う事だから信じてくれないかと思つた。

そして…再会した。

最初見た時に、一目で君だと分かつた。

君は俺の事を覚えていないの？

ねえ、

なんで、俺の事を知らないと言つたの？

ねえ、

俺の事、覚えていないの？

ねえ、

君は…俺の事、好きじゃなかつた？

尊

「…フェリシアーノ」

そう呼ばれ、ああ、やっぱりこの人はフェリちゃんなんだな、と実感する。

私の物でないその身体は、その人の声に過剰に反応して、ふいに涙が溢れてきた。

…国名で呼んで良いものなんだろうか。

…そもそも、この世界に…国と言う人の存在は…あるのだろうか。でも。

1つだけ、通じるように感じる名前がある。

私の仮説が正しければ、この名前は通じる。

「ルート」

そう呼びかける。

その人は…ふわり、と笑い、私の…フェリちゃんの頭に、手を乗せた。

そこで、意識が途切れる。

誰かが私を起こした。

「フェリシアーノ君、大丈夫ですか？」

ゆさ、と揺らされ、完全に意識が覚醒する。

目の前を見ると、菊さんが私の顔を覗き込んでいた。

ルートさんは混んでいるレジに並び、順番を待っている。順番はまだまだ先だ。

「寝ながら涙を零していたものですから…、ちょっと心配したんですよ」

「…あ、うん…」

頬を拭くと、水滴が手の甲に伝った。

「えっと、私…、フェリちゃんじゃなくて…、」

「あ、尊さんですか？すいません、間違えました」

菊さんは微笑むと、私の目を真っ直ぐに見つめてきた。

「…なんですか？」

「…いえ。…なんの夢を見てらしたんですか？」

菊さんは多分、この身体が見ていた夢の事を…ほぼ理解しているんだろう。

でも敢えてその事を聞いてきたということは、私にもフェリちゃんの過去を知って欲しいと言う思いからかもしれない。

「…多分、フェリちゃんの過去に遭った事、です」

「…そうですか。まあ、そうだと思っていました。…いつか、話さなければならぬと思ってましたよ、尊さんには」

菊さんは自虐気味に微笑むと、話し始めた。

「昔、フェリ君には、仲の良い男の子が居たんです。その子はふとした事でフェリ君と出会い、突慥貪な子でしたが、天然なフェリ君との相性は良い方でした」

「でも…ある時に、男の子は遠くに引越してしまっただんです。2人は親の勝手な都合で引き離されてしまったんですよ」

「…この学園に入ってきて。…再会、したんです。でも…その子はフェリ君を覚えていなかった」

「…それで、今に至るんです。私も、その子と仲はそこそ良い方だと思っています。勿論、尊さん…あなたも」

「…その子は、ルートさん、なんです。…フェリ君は、ルートさんに自分の事を思い出してほしいと願っている」

菊さんはうつむく。何か…悲しそうな顔で。

「でも…私は、私は…思い出してほしく、無いんです」

それは初めて菊さんの主張を聞いたような、そんな感じがした。

「私のただのわがままな事は…分かってます。でも…フェリ君がルートさんに会って、あからさまに傷ついた顔をして…フェリ君の支えになるうと、必死で…気が付いたら、好きになってたんです。…だから…もし、ルートさんがフェリ君の事を思い出してしまった

ら…、フェリ君が、私を忘れてしまっんじゃないか、って…」
菊さんは一気に捲し立てると、顔を上げて、いつものように微笑んだ。

「…すみません。こんな…惨めなところを見せるつもりじゃなかったんですが…」

菊さんは…すごく悩んでいるんだ、と、そこで気付いた。

昔、自分も凄く悩んだ事がある私だから、その変化に気付けたのかもしれない。

菊さんはすごく、すごく…私が思っているより凄く、悩んでいる。

「大丈夫ですよ、菊さん」

だから私には、慰める事しかできない。

「フェリちゃんは…菊さんの事を忘れたりしません。必ず、です
少しでも菊さんの支えになれたなら。」

少しでも、本当の笑顔を見せてくれるためなら。

「だから…笑って下さい、菊さん…」

人を慰めるのは、とても難しい事だっというのは、凄くよく分かっている。

でも、慰める方からしてみると、それしか自分にできることはないんだとよく思い知らされる。

たとえそれが…相手を傷つけることになるうとも。

* 尊 *

ぱちり、と目を開けると、フランシスの金髪が目の前で揺れていた。

「あ、フランシスだー。ただいま」

「尊ちゃん？おかえり」

フランススは微笑むと、メニューを手渡してきた。

「随分遅かったね。菊となんか話してた？」

「うん。…菊さんと、なんか仲良くなれたような気がする」

なんとなくだけど、と付け加えると、フランススが驚いたような顔でこつちを見つめてきた。

「…何？」

「いや、菊つてき。ああ見えて、心を開く事って少ないんだよね」

「…ああー」

なんかわかる気がする。

「だから凄く珍しいと思うよ、菊と仲良くなれるのって」

「へえ、そっかあ…」

私はメニューを受け取る。

メニューの表紙には、雛菊の花が踊るように描かれていた。

まだ入学して一ヶ月しか経っていないこの学校で。

胸を躍らせていた時の事を思い出す。

知らない事の方が多かったこの学校では、

今でも知らない事が沢山ある。

でも、それでもいい。

これから覚えていければ尚更。

だから。

他の人が悩んでいたら、それを助けてあげる。

それくらいなら私にもできる。

だから。

いつか、このクラスに無くてはならない存在になってみたい…。

そう、思う。

03 (後書き)

実はメニューの表紙の菊の花は、菊ちゃんの国花・菊と、フェリの国花・雛菊^{デイジー}の意味を一応付けてたんですがね。

わかんなくていいです。(笑)

微妙な終わり方なのは仕様です。

これからどうなるのかは妄想で補ってくれると嬉しいです…。…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9342u/>

学園ヘタリア

2012年1月6日23時50分発行